

川柳雑誌の証

らか「誌雑柳川」も義奥も門入

麻生路郎☆主宰

十月號



Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 365

昭和三十三年十月一日発行 月刊 創刊大正十三年 通巻三百六十五号

川柳雑誌 本社 中秋句会

三年連続の豊作です。あなたの川柳の実りにも、大きな期待がかかっております。そして、尾崎方正医博の歌みやげの美しい天然色写真に一夕を楽しみましょう。

日時 十月七日(月)午後六時

場所 光明寺 (電話九九二六〇)
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題

「良縁」 三題 麻生路郎選

「電化」 三題 川村好郎選

「立読み」 三題 後藤梅志選

「夜食」 三題 真鍋一瓢選

三題(当日発表)

席題

三題 麻生路郎

柳話

北川春巢

句評

★最近の欧米——カラー写真映写(史藝) 解説(尾崎方正)

呈賞 ★各題天位 ★路郎選天位不朽洞賞

会費 五拾円

幹事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・十悟・与呂志・白水・東洋男・潮花・愛論・一三夫

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

十一月の本社の句会は

兼題 「でこぼこ」
「教祖」
「瘦我慢」
「晝替」

★投句のみの方は郵券三十円

同封のこと(〆切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電話住吉 六〇八一番

大阪市民文化祭

第九回 市民川柳大会

大阪市民文化祭の期間に、恒例の行事として川柳大会を左の通り催します。市民文化の、市民川柳の、市民の集いにふさわしい、従来の型を破った新企画はキント市民の皆様は御満足をお願いいたします。御家族連れで、ござって御参加下さい。

日時 十月十三日(日) 午前十時開場

会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電停桜橋)

司会 西尾 葉氏

講演「泉は流るる限り泉である」文学博士 魚澄 惣五郎氏

講演「わがままな川柳」 堀口 塊 人氏

兼題「泣き笑い」 選者 中島 生々庵氏

「米」 選者 武田 北州氏

「重役」 選者 若本 多久志氏

(官製はがき一枚毎に一題二句ずつ明記 締切十月七日限)

席題 二題 (題および選者は当日発表)

余興 リズム漫画 指導 藤原せいけん氏

呈賞 ★大阪市長・教育委員長賞

会費 無料

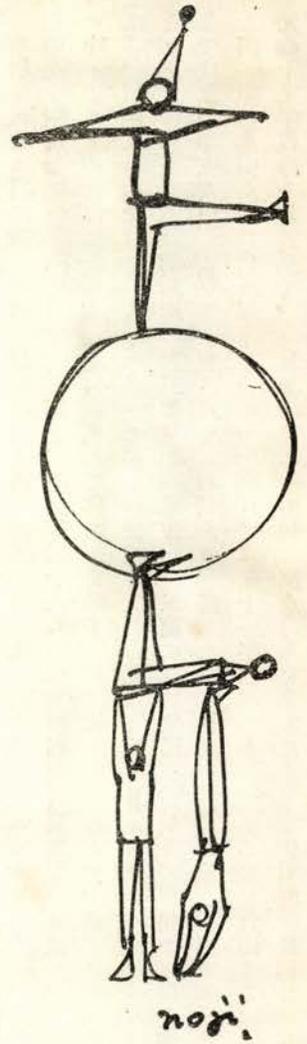
兼題投句先 大阪市教育委員会市民川柳大会係宛

大会委員 喜代子・杏花・歌都路・清緑・己之介・大貴・水昌・古灯・没食子・古方・文蝶・水密・紫香

・潮花・春巢・小松園・白柳子・恒明・貴山・梅里・摩太郎・賀峰・阿茶・十悟・小石・堰子

いさむ・しげを・操子・ささ子・梅志・豆秋・三司・与呂志・東洋男・水堂・白水・一三夫

★有志懇親小宴 閉会後、同会場に於て 会費二百円



一行詩人

麻生路郎

約手の仕事もなかなかしんどいらしいが、芸術に携わる者はもつともつしんどいのであるまいか。どうしたらい作品が生れるか。その生涯を打ち込んで、必しもいい作品が生れるに限らない。はじめから、ダメだと判っていたら、打ち込んで、のほほんで暮らした方が、その人の人生にとってどれだけいいか知れないのだが、それがハッキリしないので、お互いになやんだり悶えたりするのである。

考える秋が来た。今

の作品について、これらの作品について、この場合、他の人たち、どんな悪作に耽溺して、いようと、そんなことについて考える必要はない。どこまでも自分の作品について、思わなければならぬ。これでもいいのか。これ以上伸びる可能性はないのか。どうしたら現在の苦澁な作品から脱することが出来るか。それが問題である。よかれ悪しかれ、現在に停頓してはならない。それは芸術に携わる者にとっての自殺である。

川柳は一呼吸の一行

詩に過ぎない。いずれは滅亡する。それは間違いない事実だ。しかし私は云う。その短い一行詩に私のいのちを捧げつくして、燃やしつつ、悔いなき魅力を持つことが何故いけないのかと反問したくなるのである。だからと長い小説を描いて満足が出来た人たちはそれをやるのもよからう。しかし、私はくだらない会話でつなぐ、娼婦の手紙にも等しい小説を説きまされる苦痛には堪えることが出来ない。まして私がそんなものを書いて他人をなやます勇氣

などはこれっぽかしも持ち合わさない。曾ては私も小説のようなものを書いた時代もあったが、それは食わんがための一つの手段に過ぎなかつた。ただ食うために小説を書くのであれば、路傍で他人の靴を磨いているのと何等変りがないのである。その点、一呼吸一行詩の川柳はたとえ短かい十七音字中心のものであろうとも私の生命を刻み込むのに尤もふさわしい木石だと云えるのである。

今私はその木石に刻み込む私の川柳を誰が見てくれようが見てくれまいが、コッソリと刻み込むだけである。山上の墓碑がいつの日にか海底に沈む日のあることを思えば、私の刻み込んだ一行詩が、忘却のかなたへ押し流されたとしても、それを悲しむ必要はない筈である。永遠の旅人と云うのは旅人その人の夢でしかない。私は遂に一個の一塊の物質にすぎないのではないか。考える秋は私にこんなことを考えさせた。私の旧作に

子よ妻よばらばらに
なれば浄土なり
と云う句のあることを
思い浮かべた。
一九五七、九

十月号目次

題字……………麻生路郎
表紙……………野尻弘
一行詩人……………麻生路郎(三)
川柳家の二十四時

房川 素生・中野 懐窓……………(四)
北村白眼子……………(五)
川柳文学の再検討……………田中 辰二……………(四)
全国の名物と川柳行脚……………水谷 竹莊……………(三)
川柳女の一生……………東野 大八……………(二)
川柳身辺記……………木山 遠二……………(六)
新川柳鑑賞……………麻生 路郎……………(三)
日本精神の真髓……………花月亭九里丸……………(二)
十哲先生と私……………宮島 天真……………(三)
小咄を作る会……………不二田三夫……………(二)
北國川柳大会……………須崎 豆秋……………(三)

若本多久志・伊藤 茶仏……………(三)
山田 季賛・不二田三夫……………(二)
入賞の歎び……………西 いわを……………(二)
秋場所天位番付……………河井 爾佑……………(二)
ここがあいたので……………(二)
社の黒板……………(三)
青ペン・赤ペン……………(一九)

★
川柳塔……………麻生路郎選……………(六)
同舟近詠……………諸 家……………(一〇)
近作柳糧……………麻生路郎選……………(六)
一路集「のれん」……………若本多久志選……………(三)
「苦手」……………後藤 梅志選……………(三)
金 泥 集……………麻生腹乃選……………(二)

各地柳壇……………(三)
川柳第二教室
流行語と川柳……………北川 春巢……………(六)
質疑に答える……………清水白柳子……………(二)
不朽洞会から……………(二)
柳界展望……………(三)
編集録音……………(三)
編集室から……………(三)

一九五七、九

川柳文学の 再検討

(三)

田中辰二



明に川柳文学發展の直接の動機を形

成した前句附集の出版は元祿期を溯つていないようだし享保頃から漸く茂きを加えたことは同時代になった前句附集に種々の既刊未刊の書名が記されているのを見ても推定し得る。而して、川柳の名称は軌道に乗った点者初代柄井川柳の選句眼が勝れていた為、川柳点が代表とされ遂には川柳と云う文学の名称になったと説くのが通説であるが私はむしろ柄井八右エ門川柳の選句眼というより彼の作句などから推定してむしろ時々と所々を得たからと思ふのである。川柳文学の先行と見えるものはそれまでに相当ある。前句附のみの選集では無いが宝永二年板の「俳諧万人講」中の来山点や伴自点、一礼点、元祿十五年板の「若えびす」中の鶯水点などには川柳調の佳吟も見

えるし、初代川柳が宝曆七年八月二十五日開きで万句合を初めて世に出したより以前に、宝曆五年芝切通、中村小兵衛板、湖月序の「俳諧あづまからげ」の如き川柳点に遜色のない万句合も板行されている。更に江戸では、稲津祇空門の四時庵慶紀逸が深川湖十の其角座側判者となつて「俳諧武玉川」初篇を世に出したのが寛延三年十月であり川柳の万句合出現前にその「十篇」までを出して居るし、更に其の間にも湖十、紀逸等二十八名の点者の高点句を集めて俳諧「金砂子」が出版されているがその紀逸序文から見ると宝曆三年夏の「武玉川」五篇に次いで出版されたものであり、勝れた点も見える。もっと溯れば享保十一年刊の「春

秋関」はじめ附句の高点のみを集めた句集は数種あるけれど「武玉川」に至つて断然群を抜き川柳以上の選句眼や創作力を持つていた慶紀逸の面目の躍如たるものがあるから呉陵軒可有が川柳選の万句合から再選して板行をはじめた宝典「柳樽」が敢て此の種の出版物の嚆矢でも無ければ際立つて勝れた傑作集というのでも無くやはり時流に投じて爾来、百六十七篇まで続刊される。この考は従来の諸学者の説と矛盾する所もあるが、既刊の川柳先行の前句附集も味読し、「柳樽」は初篇から百六十七篇まで全句洩らさず調査し併せて現代の川柳文学も代表的柳誌の諸句会の選句まで最大洩らさず眼を通してこの三十年ほどの研究の帰納である事を告白する。

初代川柳は最初の「万句合」を出してから以後三十三年間、合印に天満宮梅桜仁義礼智信鶴亀叶を用いた摺物を例外はあるが毎年八月閏年は七月から五日、十五日、二十五日と月に三回五日の開き合印桜までに及び翌年彼は十五年末近くまで出版し寛政元年九月二十五日開き合印桜までに及び翌年彼は既した。又初代川柳評の万句合を中心として独立し得る句を撰集した初代呉陵軒可有は「柳樽」二十二の巻末の記事からすると天明八年五月二十九日に死んだと思われるが、これも初代川柳と同じく選句眼が勝れてるとは言えない。その選句眼が際立つて勝れてるとも見えぬ初代川柳やその選から拔萃した「柳樽」の二十四篇までを古川柳と今なお無上に有難がっている今日の柳人の甘さも私は思うものである。と同時に弊著「川柳六歌仙」をはじめ、これまで發表した「柳樽研究」や「川柳研究誌」などの何十から小論文で断定したように大衆性の扱がりを持って来た川柳作家の中には例えば源氏物語の如き古典を本当に読み得たものも皆無とは言わないが江戸時代の作家の多くはそれを読破する余裕も力も無く謡曲や俳諧季寄せの諸文献で作句していることは原書に川柳的なもつといい題材が沢山あつても注目してゐるものは殆んど無く香合に出てくる源氏の巻名か

さなくば謡曲に出てくる僅かな題材に限られてはいる点からも推定し得るし猶家庭的に婦女子の素養のために供せられた、伊勢物語なども同様であり、本当に多くのものが読み且つ題材をとった古典の代表的なものは「百人一首」「徒然草」あたりと思われる。勿論「柳樽」や「全拾遺」「川傍柳」「玉柳」などから「觸」「紅ばたけ」「柳籠裏」「俄雨」「わか葉の裏表」「落穂種」「さくら鯛」「やない筈」「末摘花」「柳の葉末」「柳の露」「後の花」「新編柳樽」などと沢山のものを通覧しても選者の見識も違ひ素養の深さ批評眼の如何もあつて全部の作家を一概にきめるのは酷であるが、ほぼ此の判断の誤っていないのを確信しているのである。そして江戸時代の初期の川柳作家が、かの俳士の中に僧侶や隠遁者、医師、武士などのような人々とか当時のインテリ階級のものが多かつたように多くはインテリ階級であり謡曲愛好階級が中心を占めていたのでは無いかとさえ思われる節々の多いのを知るのである。例えば持参嫁をよんだ古句に百両という一つの形が出来ていて

一人の化物あり土産百両

(「柳樽」一九)

百のくち十両ぬけた嫁をとり
(全三二)

百両は消え易いがあばたは消えず
(全三二)

百人なみのきりょうだに金をつけ
(全三三)

百両は無くなり顔は残つてる
(全三三)

百両で綿に包んだいもが来る
(全三四)

あたひ百両一こくをぬかすなり
(全三四)

嫁のはぎ短しといえど百両
(全三八)

百両で一生あかんべいをされ
(全三一)

三文もねえつらで百両の持参
(全四四)

註 ① 仲人への謝礼は持参金の十分の一が江戸時代の慣習

② 百両を匂わして平凡な容姿をいう

③ 結婚式に臨む綿帽子の痘痕甚だしき嫁

④ 春宵一刻価千金のもじり

⑤ 鴨の足短しといえど云々のもじり

之等は
是れは百両と申す嫁にて候

(「柳樽」一七) (安永八、

合印「宮」一〇二四)

の句の興味にひかれて次々に出て来た

ものである。この十七篇の句が出来

るまでに持参嫁の句は沢山あるが百両

との関係は見出されない。柳樽五篇に

百両を嫁に預けてこわがらせ

というのがあるが、これは明和四年の

川柳評万句合義の合印の「けつこふな

事」の附句だから持参嫁ではな

い。然らば百両型持参嫁の原句とも思

われる十七篇の「是れは百両と申す云

々」の句を見ても人情の機微には殆ん

ど触れていない凡作であるし現代人の

多くもこんな句に関心は持たず駄狂句

として捨去るに相違ない。それを何故

初代川柳も拾い上げ可有も柳樽に掲載

し、以後の作家で此の百両型に興味を

ある程度までつないだかと云えば此の

句は思はず謡曲愛好階級の者が節づけ

て口すさんだであろうと思われるかの

謡曲「羽衣」の「これは伯竜と申す漁

夫にて候」のセリフの地口から成立し

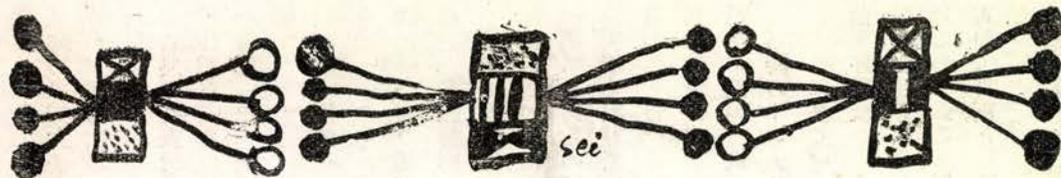
ているからである。興味をひかれて次

々これを応用したものも亦その趣味を

理解していたからであろう。こんな例

証をあげれば沢山ある。かの「伊勢物

の遺漏もあろうが私の検出したものは
(杜若) 一六〇句
(時知らぬ山) 二三句
(都鳥) 一六〇句 計三四三句であ
るが其の中に文句とりの
遠くも来ぬるものかなと田楽
(柳樽四七)
の句がある。これは吉原の近くにある
真先稲荷(後年は真崎と改められた)の
名物の田楽で、此稲荷は元千葉常胤
の石浜城内の守護神だったので繁昌した
ことは「籠飛鳥川」(新燕石十種所載)
手柄岡持の「後は昔物語」にも見え
る。そこに参詣する口実で吉原へしけ
こむ若い人々をよんだ句だが、「伊勢
物語」の文章では
「思ひやれば遠くも来にけるかなとわ
びあへるに云々」
とあるが、謡曲「隅田川」には
「思へば限りなく遠くも来ぬるものか
な。さりとては渡守舟こそりてせまく
とも乗せさせ給へ渡守云々」
と明に柳句通りである。あまり句調に
こだわらぬ柳句だから「伊勢」の原句
でいい筈だが引用したものが違うので
このようなものがあらわれるのであ
る。



大阪市 中島生々庵

避暑地から長距離小児科呼び出され
妻の留守三面鏡は閉じたまま

兵庫県 戸倉普天

村放送下駄のかわった事も云い

百姓の夏

バタバタに積んで早乙女運ばれる

大阪市 市場没食子

電話でもかけて淋しさまざらさん

淡路三熊山にて

ドテラ着て馬に乗ってるとこも撮り

西宮市 若本多久志

入社試験保守党などと書いておき

超然としてひまわりは睥睨し

義理堅く日々草は咲いて散り

屋下り宗右衛門町は素顔なり

ある程度生活力も入れて惚れ

おぼはんと呼ばれて夫人つんとする

映画館ハネた掃除の早いこと

お倅ですと女はすでに妬き

不渡りは人さまだけと思いにしに

ホノルル市

前山 北海

喉元を過ぎれば移民と又うとみ

日本語を話す二世へ職が待ち

親の受けた恩を二世は口にせず

養老院へ出世した子に追いやられ

レイかけてキッスする娘に名士てれ

白蘭の哀れ一日の贅を咲き

ホノルル市

内藤 草一郎

魔がさした位の浮気じゃ御座んせん

酔うてもルージュの手もと狂わない

ヒスの余波紅棒邪見に投げられる

東京都

宮田 不二

草人によく似た一人エキストラ

デパートから御醬油下げてバスへ乗り

ホノルル市

白砂 旋風

裁判権握ろうとして問屋がおろさず

アロハシャツ富士山を着て嬉しそう

判事も人間手加減をすることがあり

西部劇の善人は遂に腕で勝ち

川柳どころかニホン語がさびれ

夕焼は綺麗ねと魚も跳ねる

大阪市

須崎 豆秋

停年になっても刑事眼が凄く

チャンバラで貧乏人の子は斬られ

アルサロが左ぎつちよで酌いでくれ

白足袋の時代がかった呑みっぷり

ホノルル市

羽佐間 柳葉

入知恵と知ってもバツを合せとき
似合いますわよと妬みの眼が光る

意地張りは損と気のつく齡となり

一票の差で人の世に距離が出来

最悪も考慮に入れて手術台

蒲団着て歩いてるようなアロハシャツ

大阪市

福田 妄夢

捨てられたことも知らず煙草燃えつづけ
化粧せぬ女に似たり屋のネオン

大阪市

正本 水客

扇風機かけっぱなしで部屋に居ず

ビールではやはり故郷落ちつけず

小雨決行幹事だけで行く心算

母娘してはちぼちしとく大掃除

大阪市

丸尾 潮花

アロハ着て出たらアロハの口をきき

虫籠と宗右衛門町の灯へ帰り

君もまた月へたたずむひとになり

大阪市

北川 春巢

熱帯魚の世話も多忙の中に入れ

善人の眼が象の眼に似て笑い

金溜めるコッスを新書判で読み

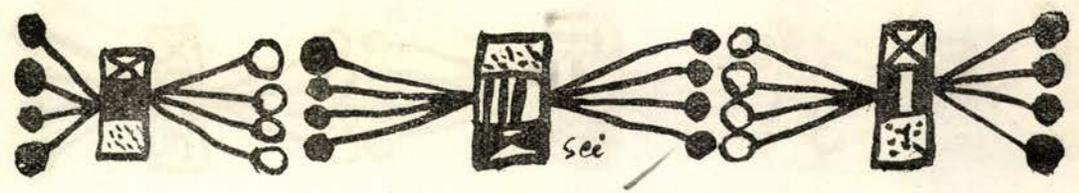
養子とは知らずうっかり相談し

岡山県

浜田 久米雄

長生きは天日風呂の湯につかり

どう見ても女が好いた顔でなし



電話まで暑しいきなりどなられる

岡山市 逸見 灯竿

お隣も秋になる日の蚊帳を干し
草だけはよく伸びる庭秋を病む
内科医のように西瓜をたたいて見

大阪市 武部 香林

退院をすればしたとて妻忙し
退院のぎりぎりにゆく見舞客

出雲市 尼 緑之助

葡萄園にて
葡萄園主はオートバイで来る
台風の前報の後のジャズソング
暴力になって別れる子の将棋

堺市 吉田 圭井堂

また次へ移る火の手をうれしがり
煙白うなって火事泥あきらめる

広島市 国 弘半休

紋付を着ると父ちゃん古くさい
台風の前告本当でまた困り
朝露を踏む近頃をうれしがり
終電車次々欠伸して降りる
遠くから見れば景色の中のドム

兵庫県 小 西 無鬼

一茶にはすまんが握った蠅たたき
こげ臭い匂いに話やとと止み
お嫁入りさす中元の糊の跡

尼崎市 小 林 文月

子と同じお伽噺を孫にする

大阪市 富岡 淡舟

おそろしやスリが稼ぎに行くと言う
せんじつめれば阿呆にかつがれた

奈良県 飯 降 白香

かびくさいふとんに郷愁フツとわき

山口県 長 野 井蛙

バックミラー居直りそうな顔に乗せ
考えておくと匂わす袖の下
イヤリング外して特価の列に立ち

呉市 林 野 麴光

逆転はエラーで勝ったとは云わず

岡山県 直原 七面山

人声を男の方が気にしてい
辞める気が派手に社長の禿をぶち
手の届くところに坐った未亡人
袖の下貰うに受領印が要り

大阪市 西 森 花村

夜逃げする朝に屑屋の世辞を聞き
つつかれて何や知らんが礼を云い

鳥取市 河 村 日満

もうこれでやめます酌を女房する
暑いから寄るなど父も個人主義
よそ様の生活は舞や哥沢や

岡山県 福 島 鉄児

元華族男をだますバーに生き
逢曳がどっちも濡れて家へつき

うかつにも子に質札を拾われて

大阪市 西 い わ を

夏ほけをしてと隣の涼み台

岡山市 服部 十九平

孤立主義預金通帳だけ頼り

尼崎市 長谷川 三司

ヌードでは売れずカリブソで売られ
惚れた目にも女房はもうしなび
あげ底の暮らし八卦の趣味を持ち
ホルモンへ通人振ったベレー帽

熊本県 有 働 芳仙

原爆の犠牲活字も小さくなり
三等でうかした旅費の生ビール

下関市 石川 侃流洞

しのび寄る秋と素足の下駄に知り
もうかつたらしい腹巻ずり下り

広島県 山 田 季賛

旧姓の印鑑もあり小金貯め
久しぶり近視か遠視かと聞かれ

大阪市 山 本 葉光

信心をしてる気私欲に気がつかず
腹立てている善人の酒強し
蚊帳吊って宵寝の好きな父だった

倉敷市 木 村 千容

物恩を知らぬ不逞に子は育ち
夏休み早々孫の来るたより
善人の末路哀れやノイローゼ



病臥しても力になつてくれた夫
夢の中まで泣きわたるキリギリス

石川県 那谷 光郎

倦怠期昼寝の裸放つとかれ
一人来て二人で来たい湯のあふれ

石川県 野村 味平

鮎を釣る男短気のようにでなし
落第をしてよかつた家を継ぐと云う

石川県 野村 味平

カレーライスだけの昼餉もはかなけれ
とうとうと水は低さを知つて居た

倉敷市 水谷 谷水

照れくさき泳げぬ妻の手を取つて
仏具屋にしてもお内儀陰気すぎ

岡山県 田村 藤波

痴話喧嘩一幕ものように済み
もう一年辛抱するか冷蔵庫

岡山県 岡田 夜潮

団扇さえ使いならしたのを使い
バイト土工恥しそうに昼を食べ

岡山県 岡田 夜潮

日時変更とも知らないで握り飯
片袖をものがれて喧嘩幕が下り

大阪府 木村 水堂

高原へ秋風吹いて避暑あわて
服装に勝つた誇を母も持ち

大阪府 木村 水堂

来客へ養子と違つた声を出し
云いませた養子の派手な蠅たたき

大阪府 稲葉 鳩花

性質と云われぬ程に瘦せていた
才能も主義もないのがもてていた

岡山県 本田 恵二郎

べんちやらもしたがあつさり整理され
十字架が死人をいっそ美しく

岡山県 本田 恵二郎

子がいてもうすい化粧で迎えてや
気ぜわしいお方西瓜の種にむせ

大阪市 真鍋 一瓢

負担にはなるが貰るとくお中元
とうとうと水は低さを知つて居た

京都市 松川 杜的

娘十九車窓に何か書き綴る
立秋を音でかんじている書齋

大阪市 後藤 梅志

手ずりの版画にも愛はこぼれてる
妻と子にひかれてただの棋士になり

倉敷市 藤井 春日

口説かれて金に見積る吐が出来
鼻毛くつつけて決裁書戻り

岡山市 津田 麦太楼

尻に敷いた亭主の惚気一寸云い
入院の女房の浴衣買いに行く

岡山県 永松 東岸子

邪見にも里で養生しておじやれ
仰山にゆかた一枚縫う二号

老らくの泉が涸れて哀れなり
母子寮の寄附に昼寝を起される

金貯めて地球破壊の夢を見る

質流れのオメガにうかと引っかかり
政客の駄句夕刊の囲み記事

堺市 高崎 雄声

字余りを唄つて妓おおしんど
入墨がなければ出たいコンテスト

堺市 高崎 雄声

むし暑さ隣は硝子割つた音
のど自慢女はしやく世と変り

堺市 高崎 雄声

名器でも鑑賞するよう女性見る
嫁つてから苦勞はいやと売れ残り

大阪市 吾郷 玲人

焼ビルがまだある八月十五日
恋してる眼よとドライに見抜かれる

島根県 藤井 明朗

みつ豆の一人ビールに切替える
金があるそうなど介抱を競い

島根県 藤井 明朗

邪恋フフフ愛情に生きるわと二人
山の宿下界のことは触れず呑み

岡山県 永松 東岸子

社の用事山の宿まで電話が来
政治家の素質と見えて自画自讃

岡山県 永松 東岸子

金借りに尋ねて見たし同期生
十分もかかりませんと外科医云う

宿直は飲んで寝ていた火事だった
妻乗せていっそ重たいポット漕ぎ

妻乗せていっそ重たいポット漕ぎ



この人も話せば解る人でなし

倉敷市 野田素身郎

また帰る機会逸した俄雨

産制もせず底抜けの楽天家

こんな低い鼻だったのか昼のパー

大阪市 清水望峰

倦怠期別居包丁さびびたまま

大阪市 木村十悟

さて落ちぬ手形握った手がふるえ

集金を二号の膝で思い出し

扇風機訓示のように首を振り

大阪市 伊達堰子

その片身造っというて窓の女医

堺夜市

待ち受ける浜のかがりへ八丁櫓

朝戻りたこといっしょに叱られる

大阪市 不二田一三夫

素うどんは順番無視して先きにくる

暑い暑い寒い寒い一生か

せがまれる蛙がうまく描けぬなり

もう長くないよと父も七十五

骨折れたうちわのように父も老い

税吏去にゆっくりめしを食い直し

兵庫県 酒井ひか平

昔ならトンボが流れていた故郷

子供如きに角落ちてあしらわれ

名古屋市長 尾越鳥

横文字を習え習えと四十五に

故郷の自然は親の無きあとも

神戸市 野村初甫

順番に百円以下をおごり合い

ハリウッドの話へ美容師手を休め

大阪市 金井文秋

熱帯魚ここのコヒーは高うつき

二号にもやる遺言にもめ続け

ほらを吹く程は税金払ろとらず

岡山県 戸田喜楽

人好しがいつも聞き手の涼み台

女教師が美し過ぎて勤まらず

くどくどと用云いつけて妻出掛け

戦没の父に泣かない子が育ち

唐津市 新岡回天子

着こなしは百姓ですと云う背広

お愛想に云えば上手でない謡

岡山県 池田古心

顔役にさせとき反対されず済み

東京都 石井高志

も一人のあたしが嘘を云ったのよ

愛してて何んで浮気と詰め寄られ

大阪府 早川清生

稲の穂が野立看板まで届き

琴弾けるそんな嫁来て食えるかい

子を海へ連れてやれない小商人

父から返事致しますとは断る気

どんぶり一杯終日連れ込み宿にいて

姑と居て夫婦喧嘩も楽しめず

資本家の婿にガラスを植えてまで

通夜で母次の養子を考える

小松市 伊藤茶仏

酔うた顔ばかり奇声を上げて居り

持前の短気言葉がもう尖がり

大勢は決したように陽が沈み

古傷にライバル何の遠慮せず

石川県 中松恒雄

妾宅の方が電化が進んどり

閑静とある住宅地バスも来ず

共稼ぐつもり自転車持って嫁し

神戸市 小浜牧人

単線で行く子を案じ夏休み

無駄足も踏んで手形で貰ってくる

不景気をこぼして払う紙幣を読み

甲子園カメラへ笑う歯が白し

高野山にて

バス停る木立の中の女人堂

天理市 菱田満秋

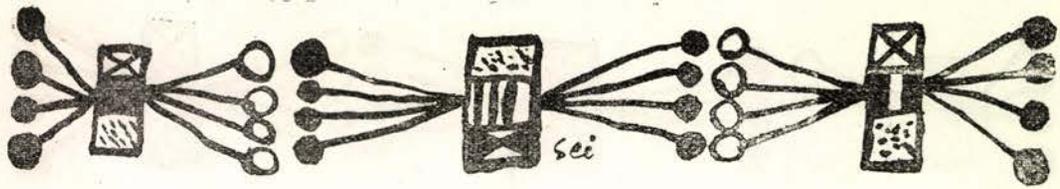
好きな道伸すに大学野球部か

無理からぬ浮気と近所云うてくれ

記録的暑さだろうが職があり

岡山県 池上知恵美

蠅を追う眼にさえヒスは角を立て



名利の朝をカンナの花が燃え
流される風へ螢はさからわず

大阪市 橋高薫風子

瓦斯タンクの傍で結構人が住み

あてどなきもの一つに湖上の帆

鳶の輪の下は一面水害地

男対男別れが酒になり

参観日この秀才の親が来ず

行李から女中アルバム出して見せ

馬の背で浅間の煙揺れて見え

下関市 中村九呂平

思い出になったキャンブの荷をまとめ

初盆を隣近所が派手にさせ

米子市 石坂新雪

呼出しの電話へ恋のうそをつき

倉敷市 藤井五茶

暑中見舞豪雨と同じ日に届き

宿題へ父どれどれともう云わず

大阪市 西川晃

炎天を黒人兵が行く暑さ

それも一理と云ったのが気に障り

若僧がいけぞんざいな口をさく

首振って立読そつと帰りける

つんぼのくせに小声でポソポソと

鳥取県 田中蛙眠子

後進へ指導する碁も勝ちたがり

コーヒ一杯でさっさと別れ話成る

憂愁の丘へ少年犬を連れ
一泊でハンケチ洗うのも女

岡山市 林葵丘

先生も写真でだけで知る名所

福々しい顔が金借る邪魔になり

同舟近詠

松山市 前田伍健

さるほどにわっしょい民族騒ぎ出し

会議すんでけろりと踊る婦人会

人生の終幕近く習う経

来松 吉井勇氏

酒も女もやめて勇も七十一

大阪市 橋本緑雨

辞めしなの意見がわかったか暑中見舞

ボスも来る視察員も来る忙しさ

長野県 高峰柳児

順繰りの表彰ながら堅くなり

身に覚えあって左遷へ素直なり

呼びつけて待たせて叱る廻り椅子

愚息豚児育てただけの人生か
給料も男を凌ぎ嫁き遅れ

三等局屈辱もおいで世帯じみ

何万年地球廻転ストもなく

大阪市 石田沐天

スピッツより重たいのよと子をあやし

録音で悲憤慷慨またトチリ

今治市 長野文庫

停年の首を下請拾いに来

又何か買って戻った子煩惱

大学にしては落書泥臭い

今治市 月原宵明

夏手袋なんでも不潔に見えるなり

ニコヨンに楽しさが待つ冷奴

四十過ぎ金に惚れてるなどと思

せめて娘を嫁って引越しする落目

重態へ高校野球鳴りひびき

新児童ヴァイオリン・サークル

講師 麻生アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地

生駒教室

TEL 306パン

西宮市仁川町五丁目七番地

くるみ幼稚園

TEL 638パン甲

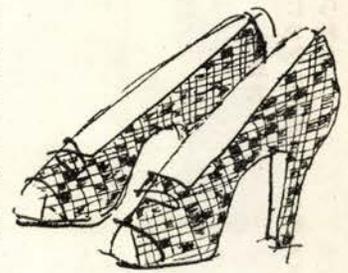
★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい

和歌山市 秋月宏方

川柳 女の一生

散文体の連句の試作
として

東野 大八



母ちゃんはや聴かれ駈け出す子は五つ
母のない子がふところ手ばかりする
正月もお祭りもない子のお下
学校は六年だけの仕込みっ
あかぎれへつぎつぎ用が追っかける
母と子の幸せそうな春へ佇
つ
姐さんの三味線持たされて雪の晩
白い足ある日女将の眼にとまり
三味、踊りつらい世界がっぎへ待ち
一本の祝い主人も改り
母さん々と女にされた夜の涙

女なり泣くだけ泣けば髪を梳き
盛り塩の白さ、みくじの字にもなれ
人の世の青春（はる）を紫粉に追うという
若い妓にすがしきものは紺緋（こんがすり）
恋という文字をはばかる舞扇
金という冷たさ恋もそれつきり
肉欲と金ひけらかす厚い唇あきらめをうつす鏡も寒い夜々
猫抱いて男待つ夜の外も雨母もまた日蔭の蝶で居たという
夢だけは、せめてすがしき人に添う

真実の情に飢えて春は逝く
愛しひと、その身もやはり妻に泣く
何もかも捨てた世間へ荒ぶ風
愛の巢は昨日も今日も金のこと
情熱に負けた男は甲斐性なし
芸妓から女給女の道一つ
女体とやある夜は男責めつくす
孤独とは、愛の渴きにつくるとこ
愛と死と、神の仕打ちも極れり
寡婦今ぞ、まだ温き白き箱しわ一つ気づいて寡婦の白き唇
死を願う人、そうろうと風もすぎ

闇深くシゲナルだけの雨が降り
慕場にも在ったきれいな花と空
人の世のあきらめ澄んだ鉦の音
女ひとりどこに消えよと雲と風

川柳の句で、一種の散文体の小文を作りたいと考へ、一夕暇をみつけて一気に書き上げたのが以上の様なものでした。
たった十七文字で、文学のエキスを、というのが、われわれの念願と思うが、一行の人間真理からトルストイはマクラに余る様な「アンナカレニナ」を書いた事実
はさておき、十七字へのあきたりない焦そうが、結局はこんな他愛もない連句に私を追いたてた。しよせん、一句への追究に、私は実のところもう力つきたのかもしれない、とがっかりもした次第ですが句作の上の表現様式に、そうしたのも決して無意味ではないと気づきました。
はじめのテーマは、女の一生といったもので、フローベルや山本有三やモーパッサンを思いうかべたけれども、つづまるところ鵲外した。

の「舞」の女主人公みたいに出来上ってしまった。こうした連句には、試みとして、つなぎの句を入れてみたものの、つなぎの句もまた独立した一つの川柳句でなければならぬ。といった心の底からのが出て割愛せざるを得なかつた。だが、こうして書き改めてみると、その希望が果してどこまで達成されたかは、皆さんのご批判にまつより仕方がなくなつた。一句一句の中に、私たちの人間生活のすべてをこめて、うたいあげていくことは、これまでの川柳がそうであり、これから後の川柳もまたそうあらねばならないとは思ふのですが、私にだけは、それが、どうしても函がゆくて、アラカルトのそれより、アラベスタの多彩さに、心ひかれてならないのです。

旧作を二、三挿入してなんとか首尾をつけたいと苦心したが、とうとう紙面の都合でごらんの様なシリ切れトンボになつてしまひました。一つの流れに、非詩的の一句も舞込んできて、思はず独り笑ひしたりして……。このほろにがい楽しさも、作句の中の楽しみとも、ふと思つて明るい貌もしたことでした。



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔四五四〕
僕の旅地方新聞にもならず

平凡な生活、平穏な生活のよきに安住し得ないのが凡人の常かも知れない。生活に不自由はしないが、まだどっかに、名譽慾と云ったものが欲しいのである。旅をしても、地方紙からインタービュー一つされないのが物足りないのである。さらにのんびりで、ほんとに旅が楽しめるのに、それでいて一沫のさびしさを感ぜずにはられない凡人の心なのであろう。

〔四五五〕
細い道どの無花果も手がとどき

空は碧い。空気が澄みきつ

じみと思わせられる。
〔四五七〕
俄か雨銅像だけが駈け出さず

予想もしなかつた雨が車軸を流すように降る。人間どもの慌てまいことか。僅かな木蔭を目がけて駈け出す姿は見られたザマではない。こんな時にも、銅像だけは駈け出さない。平然として濡れるがままに突っ立っている。それは降るものは降ると悟った姿であるとも云えよう。しかし、人間はと考えさせられるが一読五平モラスな感じのする句である。

〔四五八〕
稲妻へ蛙ゆつくり向き直り

稲妻がピカリピカリと光る。その光りの中に浮き彫りにされた蛙が、ゆつくりとこちらへ向き直つたのを作者は面白く感じたのである。人間たちが、恐怖を感じる稲妻に平然として動じない蛙の姿に一種の驚き感じたのである。

〔四五九〕
じゃあ僕も云うがと敵意あらわなり

机を並べてのライバルと仮

柳界

展望

句会

▼本社十月句会は清涼の氣あふれる十月七日午後六時からいづもの下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催される句会が珍らしい顔に会うのはうれしいものだ。本社句会を盛上げるため是非出席してほしい▼十月十三日は待かねた秋の市民川柳大会。こんどは大阪市と関西短詩文学連盟の主催で川柳雑誌社に特に力を入れることになった。川柳を短歌俳句詩とならんで文学価値を高めたといふのが路郎主幹のねらいであることは分かりすぎるほど分っている。こんどの大会はその意味で我々の試金石でもあるから一人でも多く参加をお願する。兼題泣き笑い。米重役。投句十月七日まで宛先大阪市中区中之島大阪市教育委員会社会教育課内「市民川柳大会係」あり▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪府)は九月二十四日午後七時半から瑞川居で開催▼大阪市通信病院馬ヶ辻川柳会は九月二十一日午後二時から五階講堂で開催▼南海電鉄川柳会は九月三十日午後六時半粉浜親和寮で開催▼以上いづれも路郎主幹が出席▼川雜岡山支部句会津田麦太棧氏の日赤岡山支部事務局長を勇退される記念句会として十月十九日、午後一時間開催。選者は久米雄、七面山、十九平、東岸子、雷山、麦太棧の諸氏(題十月の句会欄に)▼川雜備前支部句会は浜田久米雄氏鉄道功績章受彰記念句会をかね十月二十六日午後六時開催。選者は久米雄、櫻句楽、東岸子、柳風子。特別課題精農久米雄選▼川雜名古屋支部句会は九月十五日午後一時名古屋市中川区柳瀬町一丁目西音寺で開催▼広島川柳会九月川柳教室は九月一日慈仙寺で開催。参集三十七名盛会であった▼川雜広島支部句会は九月二十日十時、半休居で開催▼明和病院支部句会(西宮市)は九月十八日同院講堂で開催▼川雜米子支部句会は九月八日午後一時美笑居で開催▼川雜阿倍野支部句会(大阪府)は八月廿三日夜、須崎豆秋氏の趣向で怪談句会となり参会者が一人一人怪談をやった。句会場西光寺の本堂は今でも真夜中に亡者の話声が聞かれる(住職談)といううそ寒い感じの場所でも成り涙味がきいたらしい。席題もお化け、棺桶、人魂という凝つたものであった。

消息

▼路郎名吟「宿替も今度は番地ないところ」のご本尊食満南北翁の句碑が尼崎市久々地近松公園地内に建立される。除幕式は本年十一月二十二日の予定、本誌の読者にはお馴染みが目下淨財募集中

定してもいい。自分のミスを
ようしゃなく、攻めるのでい
ささか弁解に窮したが、窮し
たままではおさまらない。そ
こで「じゃあ僕も云うが」と
なったのである。斯うなると
二人の間の溝は大きくなるば
かりである。ライバルの心理
を巧みにつかんだ句である。

〔四六〇〕

看護婦につかませといてや
と病人気を使い (幽王)

いつの世にも贈賄は絶えな
い。大きな汚職問題に対して
はどんな理由があろうともゆ
るせないが、ものによっては
みのがしてやってもいいので
はないかと思う。それは看護
婦への心づけである。これも
一つの汚職だとは云えるが、
そこまで追求する必要はある
まい。多少の心づけは病院に
よつては公然の秘密なので病
人までがその点に気を使うの
である。この句は「気を使
い」の文字は調子の点から云
つて無い方がいいと思う。

〔四六一〕

秋だなと金を持たない者同
志 (七面山)

「秋だなあ」
「旅がおもわれてならない」
「青い空を眺めて」
「ちびりちびりと盃をなめる
のも悪くはないからなあ」
「ジツとしていられないじや
アないか」
「どっかへ出かけるか」
「それもいいが」
「お互いになげなしじやア、
どうにもならない」
と云ったところか。

〔四六二〕

井戸水の底の底にも秋澄め
り (灯竿)

井戸水の清澄さはまた格別
である。水晶の透明さと冷た
さは身のしまる思いがする。
その冷たい水をたたえた底の
底に秋が澄んでいるのに心を
うごかされたのである。何ん
というすがすがしい句であろ
う。

〔四六三〕

われと来て遊べ財布に金入
れて (望峰)

「われと来て遊べよ親のない
雀」の引用句であるが、「わ
れと来て遊べ」が奇想天外に
引用されているのが面白い。
一茶はせむしでまま子で、友
だちもない淋びしい生いたち
から、親のない雀へ呼びかけ
ているのであるが、この句は
悪友への呼びかけである。一
茶の句には動物愛が感じられ
るが、この句にはいささかの
友情も感じられないが、なん
となく浮きうきとした情緒が
あるので捨て難い。

〔四六四〕

清濁併呑豪語して引張
られ (千容)

「そんな堅いことばかり云
ってたんじやア世渡りは出来
きやアしない。万事はオレに
まかしとけ、決して悪くいよ
うにはしないよ」と札ピラを
懐ろにネジ込んでやったり、
ネジ込まれたりして、いかに
も大物らしく振舞っているう
ちに汚職事件の容疑者として
引張られたと云うのであろ
う。酒、女、贈賄等々の世界
がこの一句から眼に浮んで来
る。

一口五百円とあるが広く行渡るた
めそれ以下でも受付けている由。友
情を振って応募されたい。振替口
座大阪一三二九九大阪高麗橋薬
研化工▼前田伍健氏(松山市)は
九月十九日に松山市の正常寺で開
催される、第五十六回子規会に同
会顧問として「その日の子規」を
講演されると▼速水真珠洞氏夫妻
(福岡市)は福岡県婦人新聞の催
しで、夫妻、郷土史家小田部博美
氏、工芸家小戸野ユキさんの方々
が夏の夕べを彩るゆかた放談をさ
れた▼尼線之助氏(巨雲市)は八
月十七日の夜、出雲市内を流れる
神戸川の新築成った養魚場の事務
所で納涼会を開かれた由▼田垣
方大氏(倉敷市)は最近非常に多
忙。七月末から八月初旬まで名古
屋出張下旬は神戸造船所に出張な
ど旅行が続き第一の念願の雑詠も
御無沙汰の止むなき由▼西いわを
氏(大阪市)は浜名湖弁天島から
のお端書、社用で一行五名の旅。
子供の気分で海にひたり居る由、
「砂浜を歩み果てなく地平線」の
句信を寄せられた。

慶 弔

▼児島亨呂志氏(大阪市)は八月
二十五日朝三女誕生、母子とも健
全で佐千代さんと名付られた▼川
雑東淀川支那加納山茶花氏の母堂
うめ子さんは郷里高知の室戸で永
眠。謹んで哀悼の意を表する。

句 集

▼句集「生きて」は下野文芸を戦
後多彩な作品で潤おした闊秀作家
杉本ふみ子女の遺詠二四六句を取
りまとめる近頃胸をうつ句集。ふみ
女さんは宇都宮市生れ。昭和三十
二年一月二十一日死去。行年四十
五才。
「ひとり寝の光源氏を憎く聴き」
「或夜ふと星の知識のなさを悔
い」等々の句がある。
序文は前田雀郎氏新書判友杉本
利七氏装釘にかかる。非売品。

改 号

▼野呂湖鳥氏(西宮市)は鶴汀と
改号。(梅)

社 の 黒 板

▼本号から句会予告を一括して出
すことにした。ご利用賜りたい。
句会の計画はなるべく早く立て
て早く通知していただきたい。前
月五日迄に編集局宛に通知のこと

味の七-コ

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



川柳家の二十四時

諸大宰の真夜中の夢から、睡前の婦子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文獻となるかも知れない。 一編 柳屋

(16)

神戸市 房川素生

午前中は川柳のため、自分の所
属する、ふあうすと川柳社のため
ふあうすと事務所から用務向きの
ものを引っさらえて来て処理し、
午後は人と会い、または訪い、好
きなように読み、書き。夜は句会
映画、会合、読書と、時々に応じ
て、そう暮らしたいのが理想。無職
を倅いそれに近づくようなしばら
くをやっていたが、女房のふとこ
ろから愚痴が出て、さて現在は、
しがな小商人再出発の二三年目
★一時——湯上りの快い気分であ
でものんでるか、もう臥てるか
……まだ前日のうち。

★二時——今ごろまで臥つけぬ不
眠症でないのは幸福。
★三時——四時 女房にきくと寝
言をよくいうそう。いびきも
大きいそう。
★五時——六時 この時間に起き
るのを目標にしているのだけど
……ときどき寝過す。但し六時
には六丈夫。

★七時——八時 ラジオは起きた
らすぐかける。浅学補テンのた
め。起きぬけからすぐに今の仕
事の菓子製造(嘗って親から継
いだ家業)

にときどきお客を忘れさすうち
女房か息子の嫁が交替に来てく
れて帰宅。
★十四時——十九時 この時間中
川柳家なみに柳誌をベラベラと
見たり、手紙書いたり、選句し
たり(但し作句とまで行かぬ)



★九時——十一時 やつと朝食、
それから店へ出て第一線で(と
いっても第二線を設けることも
出来ぬ市場街に寄生している小
さな店) 商売。即ち不肖の兄。
★十二時——十三時 新聞と柳誌

それから商売の追加仕事と明日
への準備。もう一つ午睡(これ
は冬でも)もやる。だから一つ
のことに没頭出来ぬ。商売の書
入れ日、例えば彼岸、節句、お
盆、おついたちとなるとこの自

分の時間は勿論朝はもつと早い
し、思想まで奪われるから川柳
家としての私には有難迷惑。
★二十時——これから客はつた
りで、精々新書判。

★二十一時——二十三時 書いた
り(友達へのハガキが殆んど)
原稿でも書いていけばたどたど
しい自分だから、店が売れ切れ
ようが、近所が閉めようが、ね
ばっている。少々寒い夜でも小
商人が身にしてみているのを好き
なこととしてるので平気。閉店
帰宅二十三時前後。

★二十四時——家のコタツで一
と寛ぎ。臥てしまっていること
もある。

横浜市 中野懐窓

★六時——五時頃から目覚めては
いるが、大抵この時間を待って床
を離れる。百米程ある停留所角へ
寝巻のままスポーツ新聞を買いに
行く。帰途虫眼鏡なしでも読める
九大見出しで西鉄何連勝などと出
ているとガ然嬉しくなり中西第何
号ホームランなどがあると愉快さ
が倍加する。
★七時——娘の出勤の関係上夏冬
なしにこの時間朝食、東京へ勤め
る息子はもう出かけた後。
★八時——五分からラジオがレコ
ード音楽になるのでスイツチを切
り、又床の上へ寝転がるか新聞社
からの選句がある時は其儘取掛る
が大抵二時間位で片づく。
★九時——十時 一週二回位ヨー
ヒを沸かす(寒い頃は毎日か一
日置)面倒臭い時は風呂まで延ばし
てついでにトリストで食事を済
ます。此時間僅かの間ながらラジ
オに楽しめる。青春家族とコロの
物語。なお此時間一週一度視力回
復不充分的右眼(左眼は昨年不注
意からつぶしてき出す手術を受け
た)の治療に病院通い、先日担任
医師から元通りの視力には戻るま

世界最高水準の本格ビール
ASAHI
Pilsener Beer
ASAHI BREWERIES
DAI NIPPON BREWERY CO. LTD.
TOKYO, JAPAN
**アサヒ
ゴールド**
特製アサヒビール



やり飽きた頃夕食の買物、娘が勤めから帰るのが遅いため(六時か七時)帰ってからは市場が閉まっていると云うので兎に角品物だけは買っておかねばならない。荷風先生だつてやる事だと思つて諦めた。

★十八時——二十時 夕食後はラジオ一辺倒、野球の中継なんかあると娘や息子の好み等無視して大いに張切る。

★二十一時——五時 一昨年までは読書、句作にこれからの二、三時間が書入れたのだが、眼疾以来無理にでも床に入る。句作だけは時々やってみるが、書留めるのがおつくうなのでだんだんやらなくなつた。夢はよく見るが決して視力は以前のままで、盲目の夢は見ない、不思議に思っている。

★九時——歯科診療に従事します
長女(三十一才)と五男(二十才)を助手にしていますので気楽にのんびりやっておりますのんびりと古巣に戻り雨を聴く

白 眼 子
(註、旧友の懇請で小樽市の診療所へ援助に本年一月から六月まで行っていました)

★十時——十六時 十時に朝の郵便が来る。診療の合間に柳信の返事を書きます。柳誌が来れば一通り眼を通します。(風間はアルコール分は飲みません)

★十七時——二十四時 おやつは今家にいる三男(三十五才)長女、五男と私等老夫婦と揃つて私のパチンコ土産のヨーカンなど切つて団らんの一ときを過す

ことありますが、大抵は夜食の時間に勤めから帰る、次女も交えての時にやります。こんな時長男(三十八才)、公吏郡部松前支所勤務や、大阪在勤の四男(二十八才)而若夫婦のことや小樽市に勤めている六男(二十四才)また長男の三兄(孫)等の噂話に花が咲きます。

ラジオは私と長女の「野球」妻と次女の、「浪曲と歌謡曲」テレビは私が行きつけの「なにわ食堂」へ出かけます。チビリチビリ独酌で、ナイターを見るのが楽しみです。俳句会、川柳会、ユネコス会議等々へ月五六回は出席します。家から盛場の「大門街」へ二、三分なのでパチンコにもよく出かけます。

いと宣告され半ば諦めては居たものの矢張りガツカリした。

★十一時——十二時 病院へ行く日は往來に面した硝子戸の際にチャブ合を出して、雑誌の拾い読か句作にふける。虫眼鏡を用いての読書よりB6鉛筆さえあれば書留められる句作の方が楽だが若い頃よりの読書癖で遂虫眼鏡を手にしがちになる。

なしでは読書も出来ないのであろう独眼でほんやり眺めながらしんせいをぶかぶか灰にしつづける。半盲の悲しみからは大分抜けたが摘出した方の眼窩をまだ他人に見られたくなく、絶えず眼帯をしてゐる。こんな時句作……と思つてもなかなか三昧に入れない。ほん

函館市 北村白眼子

★十三時——十七時 決して遅れ勝になる諸方への便りを書くか往來に面した硝子戸を開けてほんやり眺める。幸い自動車の通れぬ道なので砂埃の立たないのが取柄、眼前は軒下の奥行二尺五寸程に間口三間半の外側を取巻いて、いとも簡単な竹垣をしつらえてある。その垣根に添うて、手当り次第に植えた色々な草や木がせいせいでよく夏の青さを誇っている。その青いそよぎをもう死ぬまで虫眼鏡

★一時——三時 大抵は睡眠中ですが月に二、三回は作句に呻吟したり、柳誌、新聞其他の選評(北海道新聞、毎日の「夕刊川柳」NHK函館放送局の毎月の「ラジオ川柳」HBC北海道放送局「札幌」の「四季のつどい川柳」などの)原稿を執筆して三時を聴くこともあります。

脱稿の二時コトコトと削をつ

白 眼 子
★四時——六時 熟睡中です。七時には起きてラジオをかけます

★七時——八時 末子の次女(二十二才)が勤めに出ておりますので起きてやります。兩磨は「ライオン」石鹸は「花王」朝食は軽く米飯を摂ります。





用心棒らしい浴衣にとりまかれ 高砂市
 冷房の喫茶でくしゃみして恋 同
 誘蛾灯のようにネオンへ吸込まれ 同
 大ジョッキもう敗戦の日を忘れ 同
 禿げたのを褒める言葉も英語です 大和葛田市
 自家菜園何とパセリに花が咲き 同
 お土産のないおばちゃんは嫌い 同
 中毒の不安話しているうどん 同
 朝起きを豆腐ごときに励まされ 鳥取県
 政略結婚のように身代くどう聞き 同
 気狂いと云われて村をリードする 同
 痛いとこ按摩し合って共に生き 同
 薪能生玉さんに尻をむけ 芦屋市
 催促の仕方を大学出に教え 同
 植木屋の鋏を聞いてる昼寝 同
 台風におびえ手形の日におびえ 同
 月一つ話題に池へ向いて座し 高槻市
 晩年の孤独に髪を黒く染め 同
 雰囲気を壊す藪蚊のいとにくし 同
 琴爪のまま夕立の窓に立ち 同
 ベコベコと警察ボスの猪口を受け 宇都部市
 末っ子の学資を生ます鶏を飼い 同
 ネオンまでパト。かえた彩を見せ 同
 借金の云訳妻にさして呑み 同
 十円の団扇頼りにして盛夏 大阪府
 愛慾の道へ聖書はほっとかれ 同
 お米だけあれば母ちゃん機嫌よく 同
 ロソクもくの字に曲る暑さなり 同
 ひとさまの恋だからこそ助言する 大阪府
 流感を待てるように尋ねられ 同
 批判する育ちは祖母の気に入らず 同
 行く先がみな決ってる金ばかり 同
 自惚れていたら恋までうばわれた 大阪府

吉原 紅月
 同 岩垣日本村
 同 鈴木村諷子
 同 里田一十
 同 浅野 瓢太
 同 平田 実男
 同 沢田 美喜
 同 藤本 千永
 同 板東千代美

お忍びはネオンの下のサングラス 同
 お師匠さんのパチ。日傘持。出る 同
 蚊遣りして女一人のけいこ本 同
 乞食のブライドは一円に怒り 守口市
 水泳の帰りシネマを見る若さ 同
 泥んこの田舎銀座も見て歩き 同
 お祭もむかつく程の忙しさ 同
 修道女笑って写真とらせて居 大阪府
 遅れても高らかに行く消防車 同
 遍路笠シャツ。へゆれて来る 同
 貴婦人のようなサクラが一人立ち 同
 斗病を見舞えば稲でも刈りたいと 熊本県
 無医村のニンニク臭い人ばかり 同
 水害の熊本
 岩石の下に我家と父ははと 同
 故郷は河原の村と変りははて 同
 言訳はせずに 男の道を行く 四山市
 ノックして呼んで鍵穴からのぞき 同
 頼まれるつらさは知らず頼みに来 同
 生活のゆとりへ雨もリズムミカル 同
 逃げる手を考えながら愛してい 東京都
 隣のラジオで出勤の身仕度し 同
 扇風機かけて焼酎呑んで居り 同
 三度目の恋とも見えすうなじふせ 同
 妻と嫁た人形次第にほっとかれ 山口県
 御近所の頓死を保険屋無駄にせず 同
 新仏を肴に盆の夜を更し 同
 骨折のよくなる頃に食傷り 宇都部市
 盆栽が男やもめを元気づけ 同
 タクシーを呼びま。と邪魔にされ 同
 半額の浴衣へ思案の足をとめ 大阪府
 惚れてると云う程女妬きもせず 同
 文化映画になった故郷はグムの村 同

同 大谷 月都
 同 廣瀬 挽朗
 同 淵川 秀敏
 同 上岡 一藤
 同 菊地 紀久
 同 安平次弘道
 同 神田 豊年
 同 米浪進之助

天になる。そこで有頂天の罰金？
 として金五円也を取り立て、雑誌
 が届く前にチャンと前祝を済ませ
 ていたこともあった。すこし行過
 ぎだったかも知れぬが、懐しい思
 い出ではある。

が、さてわが柳友和幸君は頸の
 横っちょに腫物が出来たとかで、
 町の病院に入院した由、他の柳友
 から私は聞かされた。丁度ラジオ
 は宗谷丸南極脱出の至難さを伝え
 ており、村里には梅が綻び初めた
 頃だった。

「せいたくなことだな、腫物ぐ
 らい賣薬でも貼りつけておけば癒
 るだろうに」と、私は例により貧
 乏臭いことを考え、別に気にもと
 めなかった。

ところが、その梅が散り、やが
 て桃が咲き、桜が咲いても一向退
 院して帰らぬので、これは案外念
 の入った腫物にとりつかれたらし

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン
 桃谷順天館



奥さんと云われて来た娘がもろり 天理市
 就職の自衛隊とは淋しすぎ 同
 ささやかな改善朝粥やめにする 同
 失職をしたで朝寝がしておれず 石川縣
 恩人の娘を妻にして不幸 同
 飾っとくミシンの月賦やと済み 同
 流感を二階の人からリレーする 同
 髪型をたまには変えて見よと云う 同
 眼が醒めりや財布の口がきどうし 同
 静まれば金魚も生きる音をたて 西宮市
 改札の年期鉄をもて遊び 同
 タクシーのお釣は妻が貰ろてくれ 同
 招かざる客が一番飲み手にて 同
 客みんな帰った風鈴すがすがし 同
 出張の夫が帰るピンカール 同
 蝙蝠も俺も中立主義でゆくよ 同
 不倖聞く俺だつて不倖 同
 幸福は一家夜の客となり 同
 母性愛猫は尻尾で仔をあやし 同
 命まで取られる金と知らずため 同
 涼風が吹いてお灸が応えすぎ 同
 共稼ぎ蚊帳の吊手を持たされる 同
 冷酒に不覚な足を取られたり 同
 廉売のチラシ私も金がないし 同
 惜しみなき肌アルサロに勤持つ 同
 自殺する夜まで賭の話する 同
 女同志になると煙草を出して来る 同
 何食って来たか無口によく喋り 同
 眼医者からまっすぐ鶏の肝を買う 同
 残業をさぼりパチンコ屋で稼ぎ 同
 金づちと云わず海には遠ざかり 同
 みおつくし淋しくなった家出の子 同
 医者顔案じた程に子は泣かず 同

仲野花鶴美 同
 同村 虹要 同
 同 光好 陽子 同
 同 野呂 湖島 同
 同 太田 蓑流 同
 同 樋口 舟遊 同
 同 松井野狸翁 同
 同 村井 城南 同
 同 永尾 永断 同
 同 松本 窓城 同
 同 橋本 雅巢 同

性質やからと気短かを押しつける 同
 水道の工事ガス管邪魔になり 同
 まあまあ顧問やなあと敬遠し 同
 成功をしない友とウマが合い 同
 交番の番茶で酔がどつと醒め 同
 親方に見せる土工の派手な汗 同
 故郷の読経やっぱり落ちつかせ 同
 非凡なる凡人同志が酌む気焔 同
 小判等出ぬ開墾と思えども 同
 恋語る浜辺にしては魚くさき 同
 山の友訪えばミキサーまで揃え 同
 氷水二杯ソング掛けてくれ 同
 日曜日話に來れば二日酔 同
 督促に來て風邪の見舞云うて去に 同
 足音で酒の量まで妻は知り 同
 ラジオも鳴らとおかな落ち着けず 同
 さん附けて呼ばれ後妻は初婚なり 同
 誘惑と戦う汗を拭ぐいと 同
 御仏は螢光燈へ美男なり 同
 宿題する父の蚊を追うてやり 同
 長男が生れてウエスト気かけず 同
 海水着どこまで露出する積り 同
 恋文へ記念切手の方を貼り 同
 角砂糖シャンソンの味聞いて溶け 同
 上出来の音頭へ月も動きそう 同
 七十の猫背も時季のワンピース 同
 臨時休業破算寸前とは書かず 同
 玉堂を掛けて人待つ床にする 同
 傘持たぬ人を帰せば雨になり 同
 水見舞四五間先がはかどらず 同
 台風が来たとラジオにおどかされ 同
 颯爽と噂の前を通り過ぎ 同
 四ッ橋を納涼バスで渡りけり 同

北村 三步 同
 同 秀川 承平 同
 同 植山 武助 同
 同 川竹 松風 同
 同 宗高矢寸志 同
 同 高野むじな 同
 同 半田 夏生 同
 同 越智 義夫 同
 同 岩原 滔川 同
 同 杉本たつよ 同
 同 竹内花代子 同
 同 田中 狂二 同

いぞ、とヤツと気になり出したと
 ころへ「終いに療養相叶わず……」
 との悲しい報せを受け、今が今ま
 で平氣でいた丈に吾々の驚きは誠
 にひどかったのである。
 和幸君との柳交は三年に満たな
 いものであったが、君の若さと、
 川柳への熱意には大いに期待して
 いたのに、忽然と逝ってしまった
 ことは誠に諦めきれないものがあ
 る。
 「並木會員句集を作るうじやな
 いですか、私が奉仕しますよ」
 謄写を仕事としていた君は入院
 のすこし前にこんなことを言っ
 て呉れた。
 「今少し皆が上手になってから
 で遅くないよ、まあ急がなくてい
 いでしょう」
 私はこんな言葉で軽く濁してお
 いたのだが今思えば、吾々に対す
 る君の好意と、川柳に対する君の
 熱意に対し、あんな素っ気ない挨拶
 はすべきでなかったと、今更に
 悔いている。
 いずれ療養のつれづれ（或は病
 苦をおしてでも）には、新聞、雑
 誌への投句は続けていたことと思
 われるが、それらの句が入選した
 か否かを見ないままに死んで行っ
 たとすれば喉ぞや心残りなことで
 あつたらうと、そのことが一番哀
 れに思いやられるのである。
 吾々水麗会当時——数日を待て
 ば雑誌が手に入るに決まっているに
 もかかわらず、ひたむきな心はそ
 れを待つことをせず、取返して内報



同権の筈の男を尻にしき 大阪市
 稅務吏の親切いちいち氣に入らず 大阪市
 物持ちの本家旧型扇風機 京口市
 就職をしたか立証買うて去に 京口市
 風采へサーピスをしてノーチップ 貝塚市
 いい話あると団扇で招かれる 京口市
 アベックで行けばわさびのき 大阪市
 男なんてアッパリーよと云うドライ 大阪市
 うちの子も怪我する元氣まで欲し 広島県
 祝杯に吞まれて妻の愚痴を聞き 京口市
 社は潰れ止めた男の出世ぶり 高知県
 淋しさは金魚の口づけ見て独り 京口市
 鋤と鉄揃えて木影屋にする 京口市
 ギター抱くこの淋しさを忘れよう 京口市
 痛い所きいて貰えば楽になり 大阪市
 信心が足りぬか短氣又起し 京口市
 ゴムバンドはめた手を出し脈と 伊丹市
 ステッキは俺の場合は装身具 京口市
 のろけてもだめだめ君は恐妻家 金沢市
 妻無邪氣娘の頃の水着着て 京口市
 宣伝車時代へチンドン屋の人氣 米子市
 医者呼んだ話は犬の病氣とか 京口市
 無理からぬ意見も聞いて多数決 宇都市
 夢を持ってもと励ます友があり 京口市
 朝の海 働く音が沖からし 鳥根県
 夕涼み台所まだ母の音 京口市
 食うことと呑むことだけはウツが合い 笠岡市
 愛人が遺産の事で顔をを見せ 京口市
 年寄をいじめるつもりでない英語 滋賀県
 脱線の話の方が面白し 京口市
 絵日記は楽しく遊んだ事はかり 大阪市
 宿題へ総動員の字が並び 京口市

安並 十七
 同 藤富 淀月
 同 護川 梢月
 同 竹内 千里
 同 平田 越舟
 同 高橋 蟠蛇
 同 藤川 沙智子
 同 吉川 悦子
 同 小川 静観堂
 同 山田 圭都
 同 神庭 詩郎
 同 鎮波 錦花
 同 景山 綾美
 同 佐内 隆文
 同 土守 蜻蛉
 同 河井 庸佑

ロマンスもなくしまわれる海水着 大阪市
 生れない内に猫の子もらわれる 京都市
 待つ事の嫌いな奴でおくられて来 京都市
 お転婆も娘であったものを買い 松阪市
 ああ秋だなあと眺める子の寝像 松阪市
 バイバイが云える子供を抱き歩き 京口市
 ラッパ飲みアッパの派手な柄似合う 大阪市
 作業帽へ鉢巻しめた草野球 京口市
 スクーター天使の如くお医者来る 岡山市
 スターで飛ばし無職とは見えず 京口市
 幸福な人が話して笑うて去に 兵庫県
 一級酒の客にされてる奥の部屋 京口市
 母親の足に合わせた日の疲れ 京口市
 ビール瓶の間を抜ける夏の風 和歌山県
 アベックのボートの後を漕ぐ孤独 和歌山県
 淋しさに団扇の骨を数えます 京口市
 七夕の笹スクーターで捨てに行き 今治市
 土用参りして 京口市
 イヤリングしてど巫女は舞を舞い 西宮市
 ミシンが買えな縫うもをさがし 西宮市
 肺痛になると云う煙草習い出し 出雲市
 手拍子が揃わず盆が来てしま 出雲市
 朝顔をほめれば種をやると云う 広島県
 引退は何時してもよい門構え 広島県
 子の不平カレライスに肉がなし 京口市
 ズンム景気もう方才もネタにせず 石川県
 多忙だと云いつつ肩書よけい持ち 京口市
 コンクールこれがお芋で育った娘 永見市
 風鈴の憎くや独り身をなぶる 京口市
 ふるさとを捨て元町で家を建て 姫路市
 渦巻いて海女の乳房が沈み行く 京口市
 フラッシュを浴び泳がない水着 大阪市

富永 建朗
 同 塚脇 笑太
 同 萬濃 修
 同 堀 風船堂
 同 福田白面子
 同 前川 越山
 同 能村美佐緒
 同 木下 一休
 同 越智 一水
 同 松島 光一
 同 加藤 虹路
 同 山田スミ子
 同 斉藤 巖
 同 関 すゞ女
 同 中田 白李
 同 島田 雄峯

体力をつくる

強力…総合ビタミン剤

強カパンビタン

純(30錠・100錠) ほかにもネラル入M

大阪市道修町 武田薬品

。青ペン

。赤ペン

(一三夫)

アジアにまた新しい独立国が一つふえた。赤と白との十一本の線の上に、三月月と星を青地に浮かせた国旗が万国旗へ仲間入したのである。「マラヤ連邦」というよりにわれわれには「マライ半島」と云ったほうがわかりよいかも知れない。



日本精神の真髓

花月亭九里丸

去る日、兵庫県篠山町の篠山小学校へ行きまして、同校の和式大広間に、麻生路郎先生の御揮毫になる

古くとも僕には
仁義礼智信

という立派な扁額を拝見して、思わずハタツと、膝を叩き、「これだ、これだ、日本精神の真髓はこれだ」と、強く心を打たれました。

同行のボヤキ漫才で有名な、都家文雄君も「ウム……」とうなつて、この名句を、あかず見入っていました。

この麻生路郎先生の真意を、文雄君と私とで、及ばずながら大いに社会へ呼びかけようと思ひ合つたものです。

と心を洗われるような清らかさを感ずるのでした。

私の下手な文字でこの名句を書いた壁を見上げながら、先生に謹んで敬意を表すると共に御健康を切に祈り上げます。

十吾先生と私

宮島 天眞

名人曾我廻家十郎——和老亭当

郎——その高弟曾我廻家十吾（茂林寺文福）の門下になつた私にもそれ相当の苦心があつたものです

終戦直後、いまの阪町に家をつけて、バラツクながら菜屋兼タバコ屋を始めたものです。その頃は中座で松竹新喜劇発足当時で、毎日のように私の家の前を通る十

吾さんに、「ワテ、先生のファンダンネン」「さよか、おおきに。部屋へ遊びにおいなはれ……」と、いうとこまでこぎつけ、許

可落とあつては、私、それからまがなすぎかな菜屋へお邪魔した。「先生のお弟子にしてみらえまへんやろか」と、いうと、黙々と色紙へ一筆。

「持ってお帰り」十吾先生からのお便りは必らず直筆で絵入ハガキ、おかげで色紙約三十枚、絵入ハガキにいたつては実に百數十葉もいただいている

六月十日のこと。十吾先生、ひよつこり拙宅へお越しになつた。「きょうは募集した女優さんたちのテストをするンや、あんたもい

ここで私は、宿願の俳優になれんと早合点して、足も地につかぬ思いで文楽座の大広間へお供した

「金がぎょうさん要るから……」と、つれない返事に、私は眼がぐらぐらとききました。お先き真暗とはこんな時に使う言葉なん

「そりやまたどうして？」

「それでも七重の膝を八重九重に折つて、とにかく七月二十日、やつと家庭劇入りをゆるさ

まま使つて、ご覽に入れたのが私の初舞台、安来節を踊る老人と船客に扮した。「アレだんねん」芸道はきびし

「アレだんねん」芸道はきびしおます。劇団入りの感想句一句

いよいよ出ることになりました責任感 (天眞)

小咄を作る会

不二田 一三夫

新大阪新聞社新谷氏のキモ入で落語家、漫才師、漫才作家、コント作家というユーモリストが一堂に集つて、道頓堀は文楽座の別館か、食堂で、「小ばなし」や「地口」を作る会が、毎月一回行われている。

漫談の九里丸、漫才の十郎、雁玉、文雄、市松師の大家から、落語の染丸御大等々の、芸能界の最高メンバー二十名近くが出席する

のだから、その会話の一一言一と言が、舞合そのまま、気の利いた洒落の応しゅうが見ものである

兼題三、席題二。ここいらは川柳會と同じである。メイ文を創るべく沈思黙考する姿、これまた川柳人と同じである。私はコント作家側から出席しているが、みんな相当によく勉強していることは世界の話題から国内ニュースは

チロン、スポーツ百般、流行もの全般にわたつて、なんでもコイである。これは私の鼻のものだが、相手が食えぬ連中ぞろいだから、マゴゴするとアベコベに食われてしまふのである。

メ切時間に迫まれてイライラする創作態度も本社句会で見るとこれと同じである。この大家連にしてこの創作態度。この創意を舞台に、放送に、常に生かそうとするその熱意は、相当高く買つてもいいであらう。

路郎先生が、柳界の大家よ、もっと勉強せよと、警告の第三の火を川柳焔にあかあかと燃やされたが、その連鎖反応は今後に待つとして、柳界の大家が、芸能界の大家より怠けていい筈がないではないか。

割烹

スタンド

水引

南区坂町
電話⑤五七二六

スキーの大瓶は大阪駅発車せんとちから松が抜かれ、もう京都あたりで空になってしまった。一行の中の誰かが「よう呑むなア弟子にまご弟子ひまご弟子」。

初対面の名刺交換に用意していた三十枚の名刺を出し尽して「名刺がありませんが、僕清水白柳子です」と頭を掻きながら挨拶を交わしていた。

三十八分遅れて金沢へ延着した一行が、十間町の浅田屋へ落ちつき、一風呂浴びて朝飯を食べる、ビールが出る、栗一文蝶の万才調のお冗談をききながらサービスをしていた愛ちゃんが「ダイマル、ラケット以上ですわ」と笑顔をほころばせていた。

満場の出席者を見廻して、禿げつぷりでは俺が天だと威張っていた豆秋、浅田屋での懇親宴で、大聖寺の某氏に出くわして、ダ。いっぺんに佳作位へ陥落してしまつた。

休憩の時間に、大会会場からグエランダへ、出られた路郎先生、うしろから前から、あっち向いても屈んでもパチリパチリと撮られており、時ならぬカメラ競技会が出現した。

帰阪の夜汽車で、庸佑、季賛、豆秋、と同席していた「金泥集」で活躍している、とよさんに「花火」に席をとられんように用心し

合せだけに出て来る名譽職（金沢桐谷紋六）二席（広島山田季賛）三席（金沢水上精）「女流」須崎豆秋選」一席



北国新聞社樓上・前右列から・夫一は横の生先路郎列前 (影攝氏志久多) 氏語の藍文・栗・佑庸・子柳白・賛季・秋豆

いや、と言われて大聖寺駅で袂れた、あととよさんから戴いた紙袋のせんべいを食べながら「花火」って何だろうと思っていたら果然次の駅で、かつぎ屋のヤミ米が乗り込んで来て、列車が満員になつてしまった、このヤミ米、ざつと三十万円位と目算した。
(須崎 豆秋)

兼・席題入賞者
「顔合せ」麻生路郎選」一席

ノスへ行つて帰つて女史になり（小松筒井吉枝）二席（尼崎西川豊太）三席（富来町林古意知）
「公園」船木夢考選」一席
の猿ひねくれたまま育ち（片山津本多とし樹）二席（新潟山田凡楽三席 広島山田季賛）
「祝辞」清水白柳子選」手が鳴つて祝辞終つたのに気付き（金沢藤元孝花）二席（鯖江長谷川美美女）三席（新潟山田凡楽）
「ニュース」櫻井六葉選」一席

女湯のニュース女を傷つける（大阪清水白柳子）二席（小松山上千太郎）三席（金沢平田史郎）
「慌てる」中島鬼水選」一席
てずに乗れと汽鐘車待つかまえ（金沢西田自然人）二席（金沢能村唐衣）三席（須崎豆秋）
「虫」山上千太郎選」一席
の渠で見た青空は最後なり（金沢能村唐衣）二席（小松内田北斗）三席（能登井西琢治）

「ガイド」田中抱月選」一席
れますとガイドのとおりバスが揺れ（松任香城白梨）二席（金沢山萬八重）三席（金沢桜井六葉）
「入歯」森下冬青選」一席
囚の金歯はどこへゆくだろう（金沢西森茂夫）二席（富山山田凌平三席（福井川崎銀甲）
「漫画」浅村紅の花選」一席
画家の家に漫画でない掛軸（福井川崎銀甲）二席（金沢宮谷幽厚子三席（富山山田凌平）

「台風下を川柳の旅」
10号台風の予報を聞いて、六日の夜行を取止めた。そして七日朝十時六分に、海田市駅で、広島始発京都行準急の最前部に乗つた。早速台風の情報を聞いてみたところ、台風はおとろえつつ、四国を縦断するとの事であった。尾道を過ぎて、岡山迄は、つい、うっ

「途中下車」 土井文蝶選
途中下車して旧友へ赤電話（豆 秋）
文案を一幕見たい途中下車（庸 佑）
途中下車してのんびりと湯につかり
途中下車するで幹事ともめており
ただ逢えるだけが嬉しい途中下車（文 蝶）
水撒いた駅へ降り立つ途中下車（白柳子）
ストウリーは途中下車してすれ違い（一三夫）
途中下車ここから支線出るところ（栗 ）

各停はゆっくり瀬田の月を見せ（一三夫）
三等の窓名月が覗きこみ
後添いとみる名月は世帯じみ（栗 ）
名月へお尻を向けて呑んでいる（豆 秋）
台風が今日名月を案じさせ（季 賛）
遠来の友名月と共に更け（文 蝶）

雨も風も消滅したが、車内は辛党の栗、文蝶、豆秋氏と、甘党の白柳子、季賛、庸佑氏に三夫と雨風混合チームの深夜句会はまだ続く。次のメ切は米原駅である。

「途中下車」 土井文蝶選
途中下車して旧友へ赤電話（豆 秋）
文案を一幕見たい途中下車（庸 佑）
途中下車してのんびりと湯につかり
途中下車するで幹事ともめており
ただ逢えるだけが嬉しい途中下車（文 蝶）
水撒いた駅へ降り立つ途中下車（白柳子）
ストウリーは途中下車してすれ違い（一三夫）
途中下車ここから支線出るところ（栗 ）

原 米 津 草
原 米 津 草

らうつらの内に通過した。
須臾もすぎ神戸を過ぎる頃から
雨は、小降りになり、風はもう止
んだようであった。五時卅五分、
汽車は大阪駅のホームへ流れ込
んだ。

一年間、全出席をめざす為には
此の台風下をも出て来なければな
らない。

「なぜばなる、なぜばならぬ
何事も」を口ずさばざるを得な
かつた、早速受付へ顔を出した。
とんに、
「よう来たなあー」の声。

川維本社句会がすめば、今夜の
夜行で、北国新聞社の川柳大会へ
出席したいと思つていた。

今日の句会には、御蔭か、お情
か、席題一句、兼題三句と抜け、
これに氣をよくした僕は、北陸へ
の旅が、なお楽しかつた。

路郎先生と多久志先生は急行で
栗、白柳子、豆秋、文蝶、一三夫
庸佑氏と僕の七人は、後の十一時
十分発、直江津行の普通列車の客
となつた。台風の影響か、何時も
の半券以下の客だったので、大変
すいているのだと、他の人から聞
いた。

台風は北陸沖へ去つたとの事、
先ず、車中句会の、席題が、高槻
あたりで出された。

あっちこちで延滞する原因は
台風に係るか、何かは知らないが
ホーム助役さんに聞いたら、信号
機の故障との事であつた。列車は

定時の二十分おくれで、米原駅を
出た。いよいよ、北陸路の旅であ
る。ここからは交流電化されてい
るのだが、それは、貨物列車だけ
で、来る十一月一日の改正からは
客車も、敦賀迄は運行されると他
の客から聞いた。列車は、ゴトン
ゴトンと深夜の中を、北へ北へと
走つた。次の席題「替ズボン」が
又出された。これは、金沢迄に出
来ればよい。栗、文蝶、豆秋、白
柳子氏の四人組は、ウイスキーの
角ビンが、だんだんと減つて行く
のが見えた。

こちらの一三夫、庸佑、季費の
三人は、一生懸命に作句に頑張つ
ておつたが、何時の間にか雑談と
なり、いろいろ一三夫氏より、柳
話を伺つた。

うつつつしている間に東の空が
白らんで来た。福井では完全に、
夜が明けたが、雨は降りつづいて
いた。席題「替ズボン」の締切を
金沢より早めて福井を過ぎて間な
しに締切りにした。これは豆秋氏
の選であつた。

今日は日曜日でもあり、何時も
なれば、列車も混み合うのが、だ
んだん客が減つて、楽な旅となつ
た。松任駅構内には来る冬を迎え
ての用意か、ラッセル車が、置い
てあつたのも北陸でなければ見ら
れぬ景である。

大阪迄は台風より、僕が先だつ
たが、大阪の句会中に追越して、

僕が金沢へ着く時は、もう台風も
おとろえて大かた青森のあたり
へ、逃げ去つていたのでしよう。
金沢駅で下車。
ハイヤー二台に
分乗して浅田屋
旅館に向つた。
北陸の空は、
台風などは知ら
ないかのように
晴れ渡つてい
た。そして今日
の川柳大会を祝
福するかのよう
に……。

ウルトラニツサン
万年筆専用
専売特許
ニツサンインキ工業株式会社
大阪市天王寺区勝山通四丁目二六
電話 天王寺 7977

露氏の憧れの人物須崎豆秋さんに会
えた喜びを語れば次々と肩の凝ら
ないユーモアがつづく正坐に近く
森田森の家(旧名
一二)氏の男性的
な熱弁に「川柳雑
誌が今日一流会社
の広告を沢山掲載
している一事を見
ても、広告価値が
あるからで、その
意味でも麻生路郎
先生が同人制を廃
し川柳の社会進出
を提唱された意義
が立派になし遂げ
られた」とされ、

懇親会

大会終了後、会場からほど近い
十間町の浅田屋(路郎先生御宿
泊)に席を移しての有志懇談会に
集まる柳人五十数名、司会者が予
定していた倍数を超える盛況に、
膳部が並べ切れないので裁縫教室
みたい机に変えても、座る場所が
ない始末、とうとう真中にもテー
ブルを持込んで文字通り制込むス
キもない次第で、路郎先生を囲ん
での懇親宴にふさわしい雰囲気
柳談風発、開宴の挨拶もてれくさ
い程の和やかな歓談に司会も嬉し
い悲鳴をあげる。
お国自慢の余興予定は場所も隙
もないので、自席から立つての自
己紹介、金沢甘茶クラブの奥美瓜

先生の健康を祝福されて船木夢
考さんは一両年に三回も金沢の大
会に出席された奇縁を喜ばれ、路
郎先生の懐旧談に眼を細められ
る、順番はついに主賓の路郎先生
に廻れば、戦時中で果さなかつた
川柳ビル建設の大抱負が述べられ
もし将来川柳ビルが出来れば、森
田、船木、桜井の諸君は専務、常
務格になつてもらいたいと隣合せ
に坐つた三人を笑わせ、遠く北国
の地にあることをすつかり忘れて
の漫談に拍手喝采で湧きあがって
須崎豆秋氏は「今日私の誕生
日です、大阪での誕生日は何時も
確なことがない、「梯子酒大阪中
がねしずまり」が落ちである。今
日は金沢で楽しい誕生日をさせて
戴いたと喜ばれ、柳歴四十年を超
える浅村紅の花、山上千太郎、川

豆秋氏がもう一題出すとい
う。いよいよ寝かさぬつもりら
しい。こんどはメ切時間が金沢
着というのでゆっくり作句でき
るが、早いこと片づけて一と眠
りしたいからノン・ストップで
句籠へ向う。
いくら経つても句籠を集めに
こないしイヤに静かなので、ふ
り返つてみると、辛党のOB組
枕をならべての討死だ。
「替ズボン」 須崎豆秋選
替ズボン派手な好みで若返り
油まみれの人々には見えぬ替
ズボン 同 (季 費)
月賦月賦又替ズボン買つてお
く 同
替ズボン特価をあさる紳士な
り (一三夫)
替ズボン二号へ寄つたことが
バレ 同
一本の替ズボン買うのにまだ
まよい (庸 佑)

小松駅より伊藤茶伝氏が乗り
込んでこられて一行に加わる。
空は青く、地は黄金の波うつと
ころ、ここは加賀百万石の御領
地、金沢へ30分以上遅れて着。
好晴に恵まれた北国川柳大
会はあと数時間にせまつてい
る。
(一三夫)

崎銀甲、松島みどり葉、清水白柳子の各氏の老練なスピーチがあり遠く広島から参加された山田季賢氏や新潟の大野風柳氏の若さと男前に陶然となるなど盛宴は何時果てるとも知れない、若本多久志さんの映写機が心よい廻転を初めれば各柳子のカメラもばしばしと写される、司会の如き禿頭組は大恐慌である。

遠来のお客の列車時刻もあることとて、八時過ぎ、麻生路郎先生の万歳と北国柳壇の万歳三唱で一応散会致し名残りを惜しみながら帰路につかれた柳人各位の後姿は本日の北国川柳大会盛況と合せて司会の目に熱いものがとめどなく流れ苦勞も忘れて見送ったことでした。

(伊藤 茶仏)

懇親宴出席者 (順不同)

麻生路郎・浅村蝶子郎・桜井六葉・森田一二・浅村紅の花・船木夢考・川崎銀甲・大野風柳・大野風太郎・山田季賢・河井庸佑・若本多久志・能村唐衣・西田自然・田中抱月・奥美瓜露・森田白林・水越幸路楼・橋本沐人・塩谷三思楼・中島鬼水・野村味平・高田茶撫郎・不二田三夫・松島美どり葉・那谷光郎・中松恒雄・桑山とよ井西琢治・細呂木魯木・本多とし樹・森本清子・山崎花の家・古市尾葉・土井文蝶・須崎豆秋・清水白柳子・山上千太郎・伊藤茶仏・村井城南・浅野芳郎・関戸宗太郎・道券茶の香・万仲一進・江指静古・内田北斗・北国新聞社大滝氏

加賀から

越前へ！

大会の翌九日も所謂、路郎日好で、すがすがしい秋晴れに恵まれた。朝八時、早くも廻されたハイヤーで一行は東別院へ着く。拝観の鐘楼は加賀門徒の篤い寄信によ



東坊路郎先生を多志氏撮影す

って木の香も新しい最近の落成と聞く。その天井には、杏林句会のもので、諸先生が師事された、木村杏園画伯絶筆の竜がっばいに凡俗を睥

一茎多花の妙運が、少し時季おくれの花を五六本残して旅人待っていた。院主の説明はやや商売的嫌だったが仏説の縁起は素直に

睥している。

杏園師がその死、近きを悟られ病軀をおしての御揮毫と承れば一入感慨深いことであつた。

竜天に昇り杏園今やなく

それから自動車は我々を有名な持明院に運んでくれた。茲は文部省の天然記念物に指定されている

受けとれるものがあつた。

蓮寺の僧植物学で説明し茲から金沢駅は近く、九時三十分発、掛川行車中の人となる。目的は永平寺参詣だが茲に於いてつらつら思ひみるに、今日は何なる仏縁か、東本願寺別院、持明院永平寺とお詣りに終始するとは、極楽往生疑いなくと先生も大笑い迷える幸お悟りの寺詣り

金沢駅で北陸線を捨て、私鉄に乗換え、正午頃永平寺に着く。駅前で軽い腹ごしらえと琥珀色の液体ワンカップ、これよりいよいよ葦酒山門に入るべく参道を登る。山内に七堂伽藍が皆揃つていて寺院は全国にも少ないと聞くが、静寂な幽境と宏大な規模はさすが曹洞宗大本山らしい。説明役のうら若い禅僧は、世俗の醜を知らぬげな面ざしで、澄み切つた瞳も印象的だつた。

禅僧の頭青きにかつと寂し師のことに触れて禅僧合掌し坐禅堂の額に「王三昧」と書かれている謂れを聞けば、我々の川柳三昧に通じるものを感じて益心しきりなり。

王三昧川柳道に通じと

この論法でゆけば路郎先生は川柳寺大管長といふところだろう。

これから二時間後、我々一行は自動車を馳つて東尋坊の奇勝に遊び、夕方、芦原温泉「八木」の湯舟に、一日の旅塵を洗つた。相憎く検査の公休日、三國節や芦原音頭は聞けなかつたが年増女中のお酌で心ゆくまで地酒のユクを味うことが出来た。(若本多久志)



産前・産後と
発育期のお子さまに...

カルシウムやビタミン等がふだんより五割も余分に必要な時です...ミルカルは沢山のカルシウムの他ビタミンやミネラル等を含み全部無駄なく吸収される糖衣錠です。
(120錠) 460円・(300錠) 800円

総合ビタミン・カルシウム剤

ミルカル錠





川柳第二教室

流行語と川柳

北川春巢

一、流行語について

現代マスコミニケーションの時代において、新しい言葉の流行のすさまじさは、今春流行した流感の比ではない。新聞・映画・ラジオ・テレビなどの如く、一時に何十万人、何百万人の眼に写り耳に入る新奇な言葉が、現代人の心を捉え、その口をついて出て流行語となるのは、当然と云えば当然であろう。人は誰でも好奇心を持ち流行におくれなれずする本能を持つてゐることは、心理学の教える所である。又新刊小説のベストセラーと称して宣伝大いにつとめ何十萬部と売れている本などにおいても同様である。「楢山節考」然り「美德のよろめき」然り「美徳のよろめき」といふ言葉が流行している。

十号台風
よるめき夫人

と云つた調子だ。(朝日新聞「かたえくぼ」)これをスポーツ新聞の野球記事などにも転用して「よるめきの中目」などと中日チームが負けた時には使つてゐる。

このような流行語をよく調べて見ると、三種類あるのに気が付く。一は漫才師などが使つてゐる奇語で、実体のない、言葉だけのものである。例えば「アジャバー」「無茶苦茶でゴザリマスル」「たよりにしてまっせ」の如きものがこれに属する。第二は流行の実体があつて、その物の流行につれて言葉も流行する、という種類のもの。例えば「神武景氣」婦人の服装の「Hライン」「Yライン」の如きもの。第三はその物が以前から存在はしてゐたのだが、それに対する呼び方が流行語となるもの。例えば「八頭身」「ロマングレー」などがこれに属する。第一のものはその流行の際には万人の口をついて出る言葉であるが、間も

なくその新奇さを失ひ、古びてしまつて遂には忘れられてしまひ、しばらく経てば言葉の意味さえ分からなくなつてしまふ運命にある。第二の流行の実体のあるものも、その物の流行がなくなれば言葉も消えてしまふ。第三の「八頭身」等の語は、過去にもその物は存在し、将来も存在するであろうが、遂には早晩忘れられてしまふことは前二者に同じである。然し第一の種類の流行に言葉の意味が分らなくなつてしまふようなことはあるまい。然し所謂流行語ではなく、流行の感興はおほえない。むしろ古めかしい感じをさえおほえる。要するに流行語は、いっかかびる運命にあるのである。そして丁度流行の服装が、流行時には猫も杓子も着ているに拘らず、流行後れとなつた場合には人前へは着て出られなくなるように、流行語も古びた場合には、人は使おうとしなくなるものである。

二、流行語を使った作品
ここ一二年間に発表された、その折々の流行語を使った作品を、手許の雑誌から集めて見た。昨年「ノイローゼ」といふ言葉が流行した。これは今迄「神経病」と呼ばれてゐた病氣で、これ迄からもあつたものだし、今後も存在することは間違いないのである。その「ノイローゼ」が流行語となつて、誰もかもこれを使った。本當

の神経病の「ノイローゼ」の句もあつたし、流行に便乗した「ノイローゼ」の句もあつた。私は昨年の大阪市民文化祭川柳大会において「ノイローゼと川柳」と題して講演した位である。

頼りにしてまっせと冗談めかしとき
水客
頼りにしてまっせと保母が
園児にからかわれ七面山
「ドライ」「ウェット」といふ言

葉が流行した。ドライとは「合理的で単純明快な生活態度の型で、太陽族映画の産物として流行した。ウェットはその反対で「情緒的で心理的な傾向を指す」(朝日新聞社「新語辞典」)のである。

「太陽族」といふ言葉も流行したが、これは石原慎太郎の小説「太陽の季節」から出た言葉である。

Y談をすれば太陽老人にしてしまひ
粗影
パンガロー太陽族は悪びれず
春日
石原慎太郎から出て「慎太郎刈り」といふ散髪型があり、この言葉も流行した。

ロマンスグレイお座敷ダン
ス好きという 代仕男
太陽族ロマンスグレイのす
ねかじり 五 茶

最後の句は「ロマンスグレイ」
と「太陽族」とのしよになった
ものである。

「クイズ」は民間放送開始以来
ラジオから流行したが、最も流行
したのは新聞等が懸賞募集した
「ボナンザクイズ」である。「ボ
ナンザグラム」というのが正しく
定期券ボナンザグラム連れ
があり 凡 茶

ボナンザグラムへ軽蔑の眼
をおくる 路 郎

と、路郎先生あたりは正しい使
い方をしておられる。が川柳の句
には「クイズ」と云ってボナンザ
グラムを指しているのが多い。

クイズでは文珠の智慧も高
がしれ 南 宗

将棋かと思ればクイズの涼
み台 万古人

ボナンザクイズへ十円の投
資する 春 巢

伊東絹子のミス・ユニバース入
賞以来「八頭身」という言葉も流
行した。「美人」の意味である。

騒がれた八頭身も母になり
文 平

八頭身寒さに勝てず着肥れ
る 沐 天

唄では「マンボ」「チャッチャ
ツチャ」が流行り、句にも多く作
られた。

木曾節もマンボも地蔵知ら
ぬ顔 省 三

腹の立つ時にラジオのチャ
ッチャツチャ 花代子

MとかWとか「M過剰」とか云
う言葉も流行した。

WMもWに返る年の春 蛾 燈

M過剰又も見合に振られて
来 史 葉

W十M女湯へはいり 伍 健

昨年後半期から年末にかけて
「神武景気」という言葉が流行っ
た。これは我が国経済の珍らしい
発展を形容した言葉だが、本年に
入って経済の底の浅さのためかこ
の現象は早くも消え、この言葉も
同時に消えてしまった。「神武以
来の景気」とも云った。

家計簿は神武以来の中で赤
永 断

臨時工神武景気という入社
雪山 山

神武以来の宣伝財布をゆる
めさせ 一 風

流行語は新聞やラジオから作り
出される、と前に云ったが、原子
炳、原爆、水爆等の語は、盛んに
新聞やラジオで見聞きする言葉だ
が、一般人には理論がむつかし過
ぎる故か、句があまり見当らない

原爆時代ふぐはやっぱり敬
遠し 春 巢

原子力人間はまだ蚊帳を吊
り 多 久 志

位いなものである。原爆や水爆実

験の「放射能雨」を詠んだ句は多
いが、これはもう数年前のことに
属する。路郎先生には

この雨に帰らしやんすか放
射能

の名句がある。「ミサイル」だの
「誘導弾」だのという語は新聞に
はよく出て来るが句はまだ見当ら
ない。

三、流行語使用の可否

さて、今迄色々の流行語を使っ
た句を見て来たが、読者は、これ
らの句をその語の流行時に詠んだ
時と、今詠んだ時とは句から与
えられる感興が違うということ発
見されたに違いない。

流行語が流行している時には、
その語獨特の雰囲気を作られてい
て、誰でもがそれを以心伝心に感
じているのである。所が流行が過
ぎ去ってしまうと、その雰囲気を
忘れてしまうために、その語が流
行していた時と同じように受取
られないのである。比較しては悪
いかも知れぬが、俳句の季語にも
同じようなことが云えると思う。

季語それだけで一定の雰囲気を作
っている。そして季語は流行語の
ように消えてしまうものでなく、
季節は毎年繰返されているから、
その雰囲気を誰も忘れることがな
い。俳句の作句はその作用に助け
られていることが多いのではない
か、と私は思っている。然し反面
その作用が作句を妨げている点も
なくはあるまい。川柳においても

古川柳にはそんな言葉が多かつ
た。下女と云えば現代の女中だが
「無智なもの」居候と云えば食客
だが「遠慮家が無稽者」浅黄裏と
云えば田舎侍のことだが「野暮な
もの」等々と言外の意味があるの
である。このような言外の意味が
分らぬために、一つには古川柳が
現代人に分らぬのではあるまいか
流行語も、何度も何度も使ってい
る中に、この言外の意味が生れて
来ると私は思うのである。「雰
気」と前には云ったのと同じ意味
である。

然し、私は又思うにこのように
して流行語を使つた句を数多く作
っているうちに、その中から必ず
や後世に残る句が生れるのではあ
るまいか、と。殊にその時代を特
色付ける言葉として、後世史家の
参考になるのも、このような句で
あらう。

流行語を使つた川柳は、流行語
が忘れられると共に、忘れ去られ
る句が多いことは疑いのない所
であらう。

川柳第二教室の講師を古方氏の
他に葭乃女史、白柳子氏。本号の
春巢氏と強化してまいりましたが
次は生々庵氏に「一路集」のこと
を書いていただく予定です。

殊に私達は、流行語を課題吟の
課題として提出することも稀れで
ない。これは川柳として邪道だと
は私は思わない。こんな場合には
あらゆる角度から流行語を見詰め
現代というものを句に反映させて
私達川柳人の見た現代を後世に残
すのも、私達の使命の一つであら
うと思うのである。

▼編集局から

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃 福壽草

句集

定価二百五十円

送費 三十円

菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字
塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大坂市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

〒595 大阪府住吉区万代西五の二五

電話住吉(07)六〇八一

質疑に答える



清水 白柳子

多読か多作か

西田 柳宏子

川柳を初めて一年余りですが、或人は「古句や他の人達の句を何回でも読む事だ」と言い、又或人は「どんどん作句するのが大切だ」と云われます、夫々その云われる事は判りますが矛盾する様な感じを受けています、丁度今行詰っていただきますので御教示頂き度いと思ひます。

多読多作ということとはどなたにでも、おすすめる事柄なのですが、どちらが先かとなると一寸お答えに迷わざるを得ないのであります。作句しかけた頃は面白い程句が出来て、見るもの聞くものすべてが句になる時であります。そんな時は選者の方も初心者だからと多少甘い点をつけて選に入れて居りますが、しばらく続きますと作者も進歩してきて雑誌などを読みていくと作句してみてもとて、及ばないような気になって作句す

るのがいやになる時期が来るもの
です。

こんな時は名句鑑賞などのすぐれた句をうんと読んで、しっかりと名句の洗礼を受けるのがよいと思ひます。そして心しずかに作句してその句を自分だけでつまらない句だと捨ててしまわないでどしどし出句することです。自分ではつまらないように思っている、名句の洗礼を受ければそれだけ表現の仕方或は句のつかみ方が進歩している筈ですから必ず作者の氣付かない句のよさが、選者にはピンと感じられるわけですからこうした場合の句は必ず出句しなければいけません。自分で捨ててしまつて出句しないと自然に川柳から遠ざかつてしまふことになり易いものであります。こんな時には多読といひましてもなるべく良い句を讀むように心がけることを忘れてはいけません。

また多作することは句を洗練する意味から必要なことであります。多作することによって表現力が向上しますし、視野も広がってきて良い句が生れる原動力とも

なるのであります。何事にも練習が必要のように多作は作句練習の意味からでも怠ってはならないと思ひます。そして出求た句を自選することに心掛けたものであります。自選は非常に難しい事ではあります。自選した句を信頼出来る先輩に見てもらつて自信をつける様にすることが良い行き方であるかと考えられます。多く讀んだために句が出来なくなつたと言ふことは、句境の廻り下げ方が足らないということになりそうであると思います。またよく似た句が出来るということも考えられますが、読まなくても類句や暗合の句は多くあるのですから、選者を信頼して出句されるのが良いと思われま

す。勿論暗合や類句は仕方がないと申しましても、讀んだ句を意識して焼直し句を作つたり、ひようせつすることは作家道德の上からいけなことは申す迄もありません。

多読も多作も作家の成長してゆく過程に欠く事の出来ない事柄でありますから句の出来るときはどしどし作句をして、行詰まつた時は名句を讀んで氣分の転換をはかり、また作句するというように続けられるのが良いのではないかと思われます。そして純粋な作句意欲によって清純な創作をするように心掛けたいものであります。

御質問は――

大阪市天王寺区宰相山町一四七
清水白柳子宛

昭和三十三年秋場所
本社句会天位番付

河井庸佑

昨年度の横綱、三役で本年も顔を出しておられるのは、水客氏、文秋氏、一三夫氏だけでした。女流作家で阿茶氏の大躍進は注目されるものと思ひます。

ここに強調したいことは、上位陣八氏のうち、三司、梅里、一三夫、梅志、阿茶(投句)幽谷(投句)の諸氏は一回も欠席してない事です。(文秋氏一回欠)

(東方)

横綱	三司	梅里	幽谷	一三夫	潮花	水堂	生庵	万楽	都志	与志	香武	利林	花車	立兒	凡九	季贊	白志	多志	妻太	万太	昇也	博也
(5)	(4)	(3)	(3)	(2)	(2)	(2)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)

(西方)

水客	阿茶	文志	梅水	白舟	淡々	静子	東岸	三月	辰始	茶月	淀月	以峰	賀助	進之	幾之	小花	花松	塊人	紫香	高志
(4)	(4)	(3)	(2)	(2)	(2)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)

蝶矢のウエスタンシャツ

東京 蝶矢シャツ 大阪

(三十二年度・自新年号・至十月号)
(同点は発表順)



入賞の喜び

西 井 文

「夫婦連れ車中は何も話さない」これは私の実感句である。痛い人生の半ばをすぎ身辺に足手まといになる子供も無くなり静かに夫婦と云うものの姿を眺めていた時偶々私達二人は旅をした。

其の印象が句になって来たのである。私は日頃「句は身近にある」と考えている。私の作句生活も既に二十有年を教える。恩師の「命ある句を創れ」と激励される言葉がひしひしと身にこたえ、快心の作は浮ばない。ややそれらしい自信作も時には出来ることもあらうが先ず無と云う外はない。この度の路郎賞句の第一席はけだし偶然と云つても然りだと思つ。ここで入賞の喜びをお互に持つためには常に作句の心境を暖める必要があると云い度い。句は自然に出て来るものでなく、絶えず創り出すものである。創作の意欲こそ命

ある句への近道と信じ度い。

私の入賞につき先生始め柳友諸兄から讃辞を寄せられた事は終生の喜びで只々感謝の外はない。この感激を柳友にも頌ち、もつともつと作句への精進に励み度い考えである。

★常任理事会
八月廿四日七時
から南区三休橋
の中島生々庵居
で開催。大阪市
・大阪市教育委員会及び関西短詩
文学連盟から、懇請のあつた今秋
の市民川柳大会に御協力すべきか
否かに就て協議の結果、快く協力
する事に決定した。当夜の出席者
は、路郎、生々庵、小石、文蝶、
梅里、潮花、恒明、葉、多久志。
★常任理事会九月二日午後七時
から南区三休橋の生々庵居で開催
前会で決定した、市民川柳大会の
協力方法に就て項目の打合せを行
つた。当夜の出席者は、路郎、生
々庵、白水、淡舟、恒明、櫻子、
水客、文蝶、潮花、好郎、紫香、
葉、多久志の諸氏。

終了後、市教委事務局の片山、
福岡両氏及川柳文学社の北州氏を
交じえて、講演者、選者等の各候
補委員ならびに大会の詮衡等を議
した。
ここがいたので
僕の机の上には摩
太郎君が持つて来て
呉れたシャボテンを
筆頭に宏子さんの呉
れた細飛びのおもち
や、薫風子君が呉れ
たサントリーと僕が
買ったマドロスパイ
プに Monoyana
のきざみの罐、ビー
ス罐に、僕の「おれ
に似よ」を揮毫の京で焼いた清水
焼の湯呑みが雑然とならんでいる
柳雑誌が生れるのだ。——路

金 泥 集

麻生 霞 乃 選

課題「遠慮」

遠慮させて頂きますと、うげなし
遠慮した座席横から坐られると、よ
度のすぎた遠慮をみんなもてあまじ
何が美德遠慮でお茶を冷たくし
ぎりぎりの縁へ無心の額を置き
討論へ女は遠慮なくしゃべり
遠慮なく寝ころぶ裸風下り 都詩子
遠慮して掛けな椅子へ人がかけ スミ子

遠慮して前席空いてる婦人会 白美
作業衣が気になり上座遠慮をし たつよ
孫にまで遠慮すると老母の愚痴 徳子
市場籠娘遠慮もせず値切り 貴洲
無遠慮が来たよと妻の眼が知らせ 陽子
失敗の当座遠慮の日を過し あやめ
遠慮するアバンアプレに座をとられ 知恵美
遠慮などどこ吹く風のドライなり 美喜
本心が遠慮するなとささやいた 俊江
遠慮する茶菓子を無理に握らされ 美舟
遠慮してもいそねた片見分け 風の子
辞退した空腹のまま雑踏へ出る 史子
遠慮などとうに忘れた飲みっぷり カネ
何一つ手を付けてない遠慮振り 綾女

五 客
遠慮する母に子の手はもう出て居 雅佐女
あんまりな遠慮へむつと腹をたて 千代美
お隣りの病氣へラジオひくくかり 周甫
遠慮して借らずに帰る虹の雨 きさ子
先客へ少うしぬる湯の加減 明美
人
小姑に遠慮しつつも派手好み 奈良子
地
新婚へ母も遠慮のあるくらし 花代子
天
兄ちゃんと呼んで遠慮のない夫婦 無名氏
軸
養生の乳も遠慮な連子で居 霞乃

白中ので
岩肌めて親類にも送る
元舗 松前屋昆布
大阪・心 斎 橋
電話 (75) 九〇八四番
三〇八四番



全国の名物と 川柳行脚 (二)

水谷 竹莊

前号に引続いて行脚の旅をつづけて行くことにする。福井、富山、長野、明石と廻つて今度は九州方面を廻つて見よう。

九州といえば、雲仙、阿蘇、霧島、西海と四つの国立公園を始めとし、温泉、溪谷にもめぐまれている。九州の名物は非常に多い。門司のふぐから始まって北九州西岸の海岸線の地方には、種々の魚を変つた調理法でたべさせてくれるので、楽しい旅をつづける事が出来る。

霧の阿蘇ここが峠の泉ざかい
阿蘇山のでんがく 晴峯

草千里霧は重たき色となり
水客

雄大な阿蘇火山をひかえた一帯の農家料理に「芋でんがく」と「とうふでんがく」とがある。里いもを掘りおこして洗ひ、湯に通したのを串にさしたものを、それを塩か味噌をつけてたべる。辛くしたり、砂糖を入れて味噌を甘くしたり、好き好き。

豆腐でんがくは都会の品のようになり、やわらかくなく、しつかりしているから串ざしにしてもこれもない。農家で、でんがくで一ぱいやりながら話し合うのも、旅の楽しい思い出の一つになると思う。

球磨川の鮎

川魚へ女房こわこわ箸を出し 春洋

九州の河川には鮎のとれるところは多いが、球磨川の鮎はとくに名高い。料理の方法はいろいろあるが、この地方独特のものを紹介しよう。これは鮎を釣りながらつくられるという風変わりなもの、夏の暑い時、鮎釣りに出る人が腰に竹筒を吊つてゆく。筒は節が底になるようにつくつてある。それに食塩で味つけした酢を入れる。鮎を釣つたら、その腹の両がわを指で押し、肛門から砂を出し、酢入りの筒に入れる。こうして釣れたものを次ぎつぎに入れながら、終日歩きまわっているうちに筒の中の鮎は、日の熱であたためられた

酢と腰の動揺でうまい具合に酢漬けになり、適度の味がつけられる。それをそのまま出して、たべてもよし、二杯酢にしかえるか、または焼いてもよい。一寸変わった趣向だが鮎の釣れる人なら誰れにでも出来て、風流な味を喜ばれている。

佐賀の鯛の生きづくり

鯛の刺身出て宿賃が気にかかり 東岸子

佐賀県東北郡東松浦半島のとつさに呼子(ヨブコ)町という町がある。雲岐、対馬に近く、美しい港で、漁業がさかんである。この名物、鯛の生きづくりは名高い。料理旅館の日浦屋では、生きづくりの客に番号をつけ一番から百番目の客には、料理をただでたべさせるといふ面白い事をしていふ。百番目に行つた客はもうけものである。この生きづくりの作り方が面白い。一分間で三人の板前が心を合せて作る。鯛の頭の下から脊中に庖丁を入れ、すばやく肉を

とり去ると、一人がすぐに刺身にすると、それを大皿に鯛の身体と一緒にきれいなならべ、「生きづくりのお通り」と大声で叫びながら仲居が駆けて客間にもつてくる。廊下にいる人々は、それとばかりお通りの鯛のために道をあける。早くせないと鯛がはねるからである。客の方は鯛を一〇分から二〇分位でたべる。鯛は自分の身がとられて、たべられているのをしらない。四〇分位すると脊すいの神経が痛みを感じてあはれて、わさびもけんも、はねとばして、だんだん色が変わり約八〇分位で鯛は死ぬ。するとまたきれいな桜色の鯛にもどる。

大宰府の焼もち

とうどん

おみくじを結ぶにうれしい

梅があり 湧三

大宰府天満宮は、

梅の名所であり、またこの焼もちはずまい。参拝の客を、赤前だれのねえさんが、焼たての焼もちたべていきなつせと方言まじりて呼びたてている。参道の茶店で売っているうどんは、とても太くてつるつるとたべられないが、ちよつと珍らしいこと特有の名物である。

鹿兒島名物桜島大根

漬物にされず大根花が咲き 上げお

桜島大根、西桜島村の特産である。重さ四貫匁、味のいいこと無類、ぬか味噌、塩漬、味噌漬干し大根にされる。大根おろしにしてかきなまこ、海老、ちりめんじゃこ等にまぜるとうまい。

門司近海の名物 ふぐ料理

皿を見ると云わんばかりの刺身なり 瑞川

大正七八年頃の流行した唄に淡海節というのがある。その淡海節に

本

福壽司

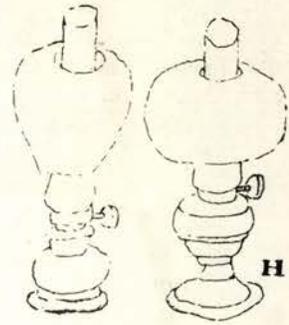
心齋橋筋大丸前
電話③三三四四番

へ足をのぼせう。

日本地図胡瓜の如く横たわり

喜由

— ペンの旅はつづく —



のれん

若本多久志選

のうれんに首巻きつて又叱られる 一進
御蟲眞ののれんが下る 奈良子
繩のれん素うどんで腹固めたり 夜潮
よれよれののれんでうまい酒を売り 味平
三代目のれんへフランス風もいれ どんたく
浴衣地の涼しいのれんもお師匠はん 静観堂
嬢はんを射止めてからののれん分け 高史
ポマードでのれんを汚すのが一人 恵二朗
結いあげた髪のににも気をつかい むじな
のれんに疵がつくと明治の叱りよう 光郎
のれんサツと嬢さんハイヒール 白李
のうれんのように婦唱夫随なり 雄声
望まれた養子のれんを守り抜き 鬼美
染のれん屋号二つに裂いて出る 代仕男
繩のれん失意どうしのうまが合い 十九平

首すじへ巻きつきそうな繩のれん
転寝の顔をのれんがそつとなで
待合ののれんの奥にある 世界
のれんにも似てて夫の頼りなさ
乗り遅れ又舞戻す繩のれん
のうれんのような夫へ停年期
仕出し屋ののれんに鯛がはねている
台所ののれんが変る妻の趣味
女湯がチラチラのれん風を受け
繩のれん女の足をふと見つけ
のれんふうわり風寝をのぞかせる
秋風へのれん命を知つており
素うどんの客がのれんを派手にさる
此処からは隣座敷というのれん
菓子司古いのれんを守りぬく
三代ののれんパチンコ屋に変わり
繩のれんの味も知つてた新社長
雑巾のようなのれんでよう流行り
繩のれん薄い頭で押し分ける
繩のれん一寸のぞいたパトロール
此処からは男を入れぬのれんかけ
遅いパパ今夜もどうやら繩のれん
創業は明治初年というのれん
大欠伸しながら朝ののれん掛け
御嘉納を自慢老舗のいいのれん
女湯ののれんうつつかりくぐり込み
ろうけつののれんに替えて秋にする
娘まで添えてうれしいのれん分け
(佳)カリブンののれんから出る女風呂
(佳)のれん譲る気文科を志望する
(佳)嬢さんに惚れられ古いのれん継ぐ

素峯 義夫
淀月 七面山
幽谷 陽子
藤波 晃庸
虹 芳仙
定月 藤波
満秋 芳仙
三四郎 芳仙
宗太郎 芳仙
俊見 芳仙
九呂平 芳仙
代仕男 芳仙
凡茶 芳仙
芳仙 芳仙
庸佑 芳仙
実男 芳仙
恵二朗 芳仙
十九平 芳仙
木魚 芳仙
奈良子 芳仙
晃庸 芳仙
陽子 芳仙
晃庸 芳仙
幽谷 芳仙
淀月 芳仙
高志 芳仙
牧人 芳仙
むじな 芳仙
葉光 芳仙

苦手

後藤梅志選

数学は苦手英語は群を抜き
あいつとはうまが合わんと言う苦手
苦手からあげた一勝高くない
スカートは苦手のお茶へかしこまり
特価品苦手と言えず妻と来る
ことわりは苦手だ妻にまかしとき
口数の少なきこれも苦手から
挨拶が苦手で妻を連れて行き
数学の苦手結構金を蓄め
出世には遠くお世辞は苦手なり
催促を優しく帰す令夫人
毛筆の苦手四五人首をふり
座るのは苦手と母の肥満振り
二代目に老番頭は苦手なり
横文字の新語明治の身がくやし
音楽は苦手と見える通信簿
まとまらぬ想へラジオが苦手なり
悠々と苦手不敵な肩の巾
一応は酒は苦手と云うそぶり
もみてして苦手の前を通り過ぎ
大臣の苦手は故郷の名で呼ばれ

数学が苦手で先生まで嫌い
苦手やというそ稅務署はつとげず
苦手だというそろばんが又狂い
奥さんが苦手でネエとよりつかず
荒唐苦手を倒す腕になり
説教は苦手だつたが親として
またしても苦手に汗を見付けられ
口下手だから反対もせずに居る
押売りは妻に任せて奥で聴き
鼻たれの頃を知られて居る苦手
甘いもの苦手農僧の鼻赤し
切札は苦手の叔父の物判り
洋食が苦手で婆アや居てくれず
一日中苦手の伯母にねばられる
治りたい一心苦手の注射する
良妻賢母それが一番苦手なり
(佳)どの顔も苦手に見えておじり
(佳)根仕事苦手釣だけよくねばる
(佳)保険屋となつた恩師が苦手なり
(佳)甘党と辛党梅田から別れ
(佳)実力は言わず苦手にしてしまい
(佳)稅務署は苦手地獄の鬼に見え
(佳)大学を出して苦手な子に育ち
(佳)苦手やと思えば思うほど苦手
(佳)別人のように苦手へ後手ばかり
(佳)仕切する苦手だんだんでか見え
(佳)読み書きは苦手耳だけ達者で居
(佳)社長にも苦手の平が一人あり
(人)苦手にも勝つて自信を取り戻し
(地)愛妻に黙りこまれるのが苦手
(天)それぞれに苦手があつて村平和
(軸)苦手だと白を握つてから分かり

光郎 東雲楼
陽子 幽谷
藤波 藤波
鬼美 同
昌男 旅風
高志 高志
不二 同
八九寸 同
十九平 同
雄峯 同
白李 同
静馬 同
蓑流 同
夜潮 同
淀月 同
よし 同
一鶴 同
高史 同
恵二朗 同
万古人 同

老花物語

いのちある句を創れ

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社 川柳忌句会 (大阪市)

九月七日 午後六時 於 光明寺

野辺に早や黄菊白菊が咲くエレガントな秋へ、空の暴君台風10号があはれ込むというきょう。氣象台をウロウロさせていた10号が今夕は間違ひなく近畿を襲うという。しかし柳翁を偲ぶ熱心な人々はズブ濡れになって参集される。

川村好郎氏の柳話。戦前岸和田の句会へ初めて出たころから、戦後の今日なお健吟を吐かれては圭井堂氏一人。

というように川柳人口はあまり増えないと嘆かれ、川柳上達の道は句会場へ早く行ってウンと練つたり、又は遅い目に出席して早く作る勉強をしたと好郎流を披露される。戦時中ともに警報下にありながら、勇敢に柳魂をたぎらせつづけていた人々の中に一女性があつて、その後死亡したと思つていたところ、最近その女性が『川柳雑誌』を見て手紙を寄せし支那句会へ出席されたという美談をもつて結びとされた。

路郎先生の第一声は、きょうこの暴風雨を働いて出席された皆さんは優等生だとお賞めをいただく——この風雨を乗り越してきたところに人生あり。と、魂のすわった生活するところ、そこに転落も

悲劇もないと述べられ、努力は「何か得る」の鉄則であると、青年のような力強い声が、窓ガラスを打つ20米の台風にブツブツかかってゆく。今夜金沢の北国川柳大会に向う意気すでに台風をのんでおられた。

川維川柳まつりの特別課題「夫婦」第一席の西いわを氏に、川維のシンボルである栄えの優勝楯が先生の手から授与されて万場の拍手が会場をゆするころ、台風も閉会したのか、庭の葉末になく虫の音がチチチと耳へながれてくる。

今月の不朽賞杯は丸尾潮花氏ニツクリうけられる。閉会9時30分——(F)出席者 路郎・一三夫・圭井堂・多久志・紫香・潮花・十悟・笛生・旅風・淡舟・生々庵・梅志・好郎・文秋・高史・静馬・澁月・逸人・梅里・利武・庸佑・三司・どんたく・月都・湖島・すゝむ・よし・薫風子・高志・季賛・いさむ・狂二・雲洲・文蝶・葉乙女・進之助・いわを・柳宏子・博也・与呂志・水茶・山舟・繁雄・雄声・栗・繁子・宏子・霞乃・

兼題「鈍才」 土井文蝶選

たのしかり鈍才として社を思い 与呂志
鈍才の腰弁当でかせぎに出 笛生
鈍才の方へ、妓は座り変え 潮花
鈍才のくせにもつかり師にそむき 生々庵
鈍才の死がよつぽど鈍才にもこたえ 淡舟
鈍才の姉が夫を守りまきり 淡舟
鈍才の父に、鈍才励まされ 潮花
鈍才の出世話は記事となり 栗舟
鈍才の見合に母は落ちつかず 周甫
鈍才はおれに似ていて叱られず 香林
鈍才はちろほり智慧を借りに来る いさむ
鈍才の信じられて いる強さ いわを
我に似た子の通知簿、苦笑い どんたく
鈍才と自覚してから 奮わらず 一舟
鈍才ときまいた息子に 査われ 美十
鈍才な友のプランに乗ってやり 季賛

兼題「審査員」 若本多久志選

審査員虚心担懐とはゆかず 旅風
審査員だんだん点が辛くなり 柳宏子
審査員褒めてやんわりくさとき 好郎
審査員同志の意見食い違ひ 幽谷
ミス日本どれも入れたい審査員 どんたく
審査員女に甘いと、こも見せ 水茶
審査員自分の口もふくらませ 香林
おつかないおっさんの前で踊らされ 圭井堂
審査員バストのでかいのを憶え 博也
審査員下から上へまた見上げ 紫香
おなじみが又来ていたと審査員 高史
審査員小さな欠伸をかみころし 葉乙女
鐘一つつけてやる気の審査員 潮花
審査員ヒップの欄へ百と書き 一三夫
審査員キングサイズを驚かず 与呂志
採点が皆違つて、審査員 進之助
審査員ある一点を見逃がさず いわを
ウインクにたじたじと審査員 淡舟
審査員フト好色の顔に見惚れ 文秋
審査員女房が妬まな眼で見惚れ 静馬
審査員逆さまだつた絵と知らず 一三夫
審査員終りの方は事務的に 淡舟
惜しいですなと審査員なれたもの 雲州
女房と比較してみる 審査員 狂二
審査員まともに唄は聞いていず 潮花
審査員行儀のわるい足も居り 澁月
ええ方の眼鏡とかえた審査員 博也
飲み込めぬ酒とは辛い審査員 暇子
審査員席へ真夏の上衣着る 季賛
審査員ゆつくり煙草消して決め 薫風子
審査員八等身に食傷し 阿茶
大根を連想して 審査員 多久志

兼題「舌」 松江梅里選

叱られているのに舌が出てしまひ 薫風子
代議士も女将の舌に丸められ 一三夫

毒舌で火花を散らす倦怠期 陽子
舌先きで丸めて丁稚こき使ひ 十悟
舌を出す癖がテレビに出てつり 一舟
送らして舌を出されて知らず去に 高志
立売りの舌はくるくるよく廻る 美舟
鏡舌の妻に押売荷をしまし 周甫
舌先でまるめて婦子肩を打ち 潮花
食通の舌がうるさい事を云い 薫風子
うたかた場へ来て政治やの二枚舌 進之助
どたん場と渾名で呼んで舌を出し 多久志
毒舌を着にちびりちびりやり 阿茶
よくまわる舌があるから嘘つき 文秋
舌出して仲居と仲居だけ笑ひ 三司
舌もつれ出して血圧気にしだし 進之助
よく舌を出したわネエと同窓会 繁雄
舌二枚持つてほんとの友がなし 陽子
舌出して貼つた切手と知らぬ恋 十司
舌出ところが貼つた今年の灘の出来 博也
舌禍など気にせず大臣よく喋り 三悟
ふく料理舌もつれた慌てよう 雄声
猫舌のとこまで親に似て生れ 陽子
藪医者へ思い切り舌出して見せ 暇子
舌三寸場能させる京訛 阿茶
反抗を舌打する意志表示 松里

兼題「初対面」 西尾 菜選

初対面若い心に灯がともしり 十悟
初対面舞台交で引きあわせ 潮花
初対面九点つけてお気に召し 旅風
初対面趣味の事からうちとける 文秋
初対面予備知識だけ聞いて行き 多久志
初対面名刺と違つてお人柄 高史
初対面祖先の名前から名乗り 周甫
初対面ビールの泡をこぼす程 与呂志
初対面上座を避けて向いあい 湖島
初対面元は華族の生れとか 雄声
初対面もう投合と言う 仕草 圭井堂
親だけが初対面の見合いの場 一舟
初対面溶けるに早い十八九 十悟
初対面二号の方も負けていず 好郎

早よ帰らんさいと貸し傘叱られる
あて外れ腹を空したまま帰り
あて外れ煙草のつりをババ呉れず
現実の冷たい壁に突き当り
手土産を渡してしもたあて外れ
ざりざりになって期待にそいかかる
長男のくれたのれんを養子継ぎ
賢夫人のれんに疵をつけさせず
のれんから店の空気を感じとり
流感につき休診を仕り
別室へ追いやってから金のこと
小松園

雑川 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

たそがれの女四糸河原町上る
たそがれを庶民の生活に井戸
たそがれの露路の深さを呼び出る
しめし合わずそのたそがれを信じ切り
白鳥の恋噴水を一廻り
この橋で止まるべからず大文字
大の字のもゆるもる妻の横がおに
真黒な空へ大文字の挑戦
大文字みだらな人が浴衣でいる
司郎

田中鳥雀報

鯛の皿目出度い席の場所をとり
浪人へ別れをつげる鯛の膳
本鯛が勢ぞろいしたよな披露宴
鯛の値に迷いガマガチばちつつかせ
弁当箱の音する鮎さびしけれ
ボストン一つで替わる職人羨まれ
旅館妻の愛情ゆきとまきとどき
退院の靴の手入れも久しぶり
七首のように証文が出た靴
ブーツもいばつた頃の古靴
弁当箱だけには見えぬ鮎さびしけれ
靴もう一人前の新社員
窓からの靴に席をしてやられ
喜びの写真みな肩を組む
喜びのつきあい酒は夜を徹し
義理の喜び最上級に言い
フンフンと受話器の背の嬉しう
不安な喜び今日父となり
よるこびの墓参りとわかる二人連
薫風子

雑川 備前支部句会 (岡山県)

浜田久米雄報

節高い指を見合で見込まれる
真操を売った指輪が良く光り
洗濯の泡の中から子を叱り
泡のままの手で道順を教えられ
盛上る泡をひげまでつけて酔い
札東の前で寝返り促がされ
一身上入れた女に寝返られ
寝返りを打てば美人に隙が出来
未練などないが泣く子に遂に折れ
再婚へ未練を捨てた顔で坐し
あの時の未練手紙が長くなり
別れ話やった指輪に未練が出
謎をかけられて一本買うと決め
金持の真似も出来ないままに
寝返りが神経痛のもととなり
永流

浜田久米雄報

すき焼きの豆腐ばかりを父が食べ 久米雄

散髪屋の成行きに目を移し
たまさかの散髪子等に冷かされ
豆腐屋の彼岸の朝が忙しい
鉄瓶の湯気へ恩給証書が来
満員の鼻先髪にくすぐられ
眼科とは言はず寿命にしてしま
寿命でしたと未亡人身をやつし
子等が来てつぶしてしもた冷奴
はけている割に散髪ひまがいり
散髪屋の弟子に実習台にされ
丸坊主に刈つて涼しい夏になり
頭数揃っていと席がつみ
頭だけ見れば六十の坂を越え
鼻先へくも真直ぐに降りて来る
くやみより先に豆腐屋へ電話
幸情 竜泉 仙

雑川 倉敷支部句会 (倉敷市)

楳原一善選

大作のモデル噂の女性に似
貝拾い帰れ帰れと潮が寄せ
金魚ギラつかせ証文仕舞込み
大作だそうなが僕にわからぬ画
扇風機今年も夢として終る
貝拾いでつかい船に手をやすめ
子供等を連れ出す途に汗になり
貝拾いえものちびり買ひよる
貝拾い浜辺育ちでないし知れ
汗汗汗キートンメイソンにのみきられ
皿の桃客の行儀へ鯛が来る
初孫を抱きに本場の鯛を揚げ
まだ親の光りが届く椅子に居り
汗知らぬ暑しを望み汗に生き
貝拾いバスを連らねて山の子等
踊り子は汗だく見物は蚊に喰われ
我儘が会社で通る七光り
貝拾いいちいち名前書いて入れ
貝拾い大きな籠を持って行き
子等いつそ裸で楽したらいい水
大胆なポーズで女貝拾い
遠也



見つかれば女の方がいい度胸
あつさりで見切れば女また値切り
つけ馬を彼の女彼の女と誤解する
万古

せびるだけせびるで見切るのも妓
我命捨てるも血を吸う蚊の度胸
つけ馬に叩かして居る勝手口
つけ馬に家の大さき見せてやり
つけ馬を帰して恐い妻になり
見切品売切れた頃に詰かける
節米の筥の雑炊よく食われ
女には惜しい度胸で売れ残り
つけ馬に同情されている落目
つけ馬に介抱されて戻つて来
花鉄枯木の癖をもてあまし
見切りつければ手抱足らんと非難され
尻馬に乗つたで今さら引けもせず
母の会マダムが地味な柄で来る
颯爽と女房が飛ばすスクーター
商魂は灰皿までもネームつき
左きき呑める話は異議はなし
人並みに異議もあります養子でも
尻馬が尻馬に乗る座談会
地味でしようか何んとか云つて見せたがり
吾が腹が痛まぬ話へ異議はなし
スクーター乗り廻してて嫁き遅れ
ネクタイの地味へ不服な後妻が来
豆腐一ちよう運ぶスクーターの足を借り
肩書が大衆席をゆるささない
隣りから隣りへ噂詰められ
吸がら山にいだらまた会議
異議のある眼つきへ酒をほめかし
春日

雑川 出雲支部句会 (出雲市)

尼 緑之助報

見つかれば女の方がいい度胸 方大
あつさりで見切れば女また値切り 谷水
つけ馬を彼の女彼の女と誤解する 万古

汗流すたらいに月ののびちじみ
汗かいて来たが遅刻は叱られる
借衣裳汗の染みを気にしつづつ
ビール飲む彼女同権主張する
同権は今日も纏詰喰わされる
課長にもあつた同権子を背負い
無理やりに裸にさせる子供角力
倦怠期裸の風寝はつとかれ
裸の子追うて出たのも裸で居

雑川 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶弘報

阿弥陀経珠数の数までよみつくし
ボクットの珠数手に触れてあらまき
珠数持った坊さん時局の話もし
珠数玉の中に尼宮住み給い
酔えば僧念珠も酒席にはつとかれ
俗評も珠数も切切り恋に生き
焼香の順に隣りの珠数を借り
ドラ息子浦島太郎になりたがり
童宮を入れれば金魚に邪魔がら
童宮から来たような鮎酒を呑み
童宮は鯛もヒラメも踊り好き
海水着着れぬ母さん浜に居り
海水着親に言えないのが着たし
海水着あまりに妻の老けを見る
海水着ばかり眺めて陸涼し

雑川 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

初物は眺めるだけの子沢山
子沢山一姫さんは母代り
その昔表彰されたる子沢山
子沢山主人のことをつい忘れ
子沢山お孫さんかたとすねられ
子沢山どうして降りよう満員車

子沢山ママの口へは入りかね
子沢山猫も玩具にされて渡せ
立話だんだんはしに追いやられ
浦島の話ジェット機で途切れ
これからが本論と云う長話
いい話じゃがじやまして聞い
話下手鼻の頭の汗をふき
話甲斐あつてうれい酒をくみ
釣天狗たまにはじゃこも釣る話
お土産はたのしかったと話だけ
こだけの話ですよと触れ歩き
ハネムーン未来の話虫も聞き
あいそよく話したあとで釘を
サングラス盛場をゆけば料め
人相を眼鏡で変えてゆくところ
老眼鏡取まで妻に屈けられ
白衣きて眼鏡の奥にある知性
遠眼鏡何見つけたかはなさない
老眼鏡忘れ子供に値を見させ
色眼鏡ファンをさけてる姿なり
説法へ眼鏡はずして坐り換え
お眼鏡にかかった嫁には子供なく
片耳をはずして立読みする眼鏡
色がねとればアロハも良い男
お爺ちゃんが呼んでる眼鏡だろ
開店そうそう色眼鏡が入つてき
サングラス揃うて着いた山の宿
首判押すも部長眼鏡かけ
ざあまずと噂話でまねをされ
ウラン出る噂に村は活気づき

親切のほす噂の種となり
噂だと打消しながらゴール
探しての新聞で坊やかぶと折り
大掃除古新聞に手をとられ
公園の風寝新聞顔にのせ
狸寝と知らず新聞そつと置き

杏林川柳會 (大阪市)

麻生路郎先生選

師の影をふまぬどころか足りし
鳥影を気にする程のかつきよう
影もない畑仕事に目がうるみ
片影になつて行かうと風寝をし
話し合い結局ボスの説に落ち
話し合い押し強さが邪魔になり
話し合い解せないままにけりつき
話し合い筋道たつた方がまけ
今になり親馬鹿なと父思い
親馬鹿はモテルの衣装買つて来る
人間にしたは親馬鹿なればこそ
親馬鹿の汗のすべてを子にさけ

333 川柳會 (堺市)

川村好郎報

こんな服いだと子供の小さい見栄
散髪をしたらまだまだいける僕
隣まで来た流感の気味悪さ
流感へ阿呆でも油断出来ぬなり
前身は言わじ会社で平社員
前身は云うまいマダムウイキング
前身の一部は履歴書から除き
雨つづき嫌ですわと傘を売り
さつそうと産婦人科へドライの娘
夏休み実行したのは風寝だけ
交又点ふと気が変わり飲むとする
映画見てふと古傷を思い出し
交又点バックミラーを拭いて待ち

帝化川柳會 (大阪市)

佐野白水選

夕刊を敷いて素足になつた旅
灯を消して小説の先気にかかり
枕元の一輪差しが春を告げ
枕元枕が派手に転つて竹梅
絶景へサイクリングの早い風
せせらぎを渡る素足に野次が
留守番の小説気兼ねのいらぬ足
今日のことみんな話した一年生
小説になるよな夢を抱いており
サイクリング二十才の若さ風を切り
サイクリング尻を振り振り昇つて来
ハンカチを胸に白々一年生
サイクリングどの辺から風邪をひき
サイクリング肥えた身体をもてあまし
サイクリングの汗が美味しい風にする
サイクリングの汗が美味い風にする

大萬

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
★大方川柳(第八十回)を募る
兼題「再婚」路郎先生選
締切・十月十五日(郵致五部以内)
発表・十月廿一日(店內発表)
投句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大方川柳會宛

霊柩車に追越されたり交又点梅里

晴美 好郎 千里 素男 三休 雄声 高志 一楽 狂二 美代子 元歩 雪山 一楽

宮西 光一 舟遊 露月 二平 善坊 留三 明海 東雲 すみ江 撰郎 正姓 珠絵 留三 丹誦 杉野 紫路 朝田 弦月 園男 まこと 九里三 文女 川太郎 よし丸平 撰郎 知司 夢人 英路

らか室集編



路郎

★澄みきつた空、衣類の肌ざわりもすがすがしい。句を作るにも、酒をたのしむにもいい季節になった。マドロスパイプを啜ってしみじみと秋に親しもうと思う★前号も好評だったが本号も特異な味が併せていることをよろこんでいた。きたい★田中辰二氏の「川柳文学の再検討」の続稿や東野次八氏の散文体の連句の試作「川柳女の一生」などは他の柳誌には見られないもの、その他簡筆的好読物の多いことも本誌の特色であろう★拙稿の「新川柳鑑賞」は世人に川柳とはどんなものかを味ってもらい、川柳という短い詩型に親しみを持ってもらいたいために、なるべく判りやすく書いて来たが、本年一ぱいで五百句にしたいと思つて

いた九月七日夜の本社旬会を終えたとすくその足で、十一時の青森の急行で北国川柳大会へ出向いた。金沢の宿へ着いたのが、八日の朝の六時半ごろ、駕屋へ這入ると同時に新聞社のインタービュールがはじまり、終日忙しかつた。別稿の通り、大会は盛会であつた。ホントに私の中からたはたは

翌日の朝だつた。新聞を読んで朝の食事をすましたところへ多久志君が来てくれたのですくに宿を発つて東本願寺別院へ俵を飛ばした。この山門の天井に描かれた木村杏園画伯の竜を眺めた。それからである。杏園画伯は数年前、我が社主催の阿波踊見物に行を共にされ本誌に麗筆を揮われていたので記憶されている方もあらうと思われが、昨年重病を得て養善申郷土会から山門へ揮毫して欲しいと云う依頼があつた。病患がなおるものなら擔つてから筆を執りたいがと医師に相談したところ、気分さえよければ描いてもいいでしょうと云われたので、とうとう病軀を押して月余にわたつて描きあげられたとのことである。その苦心は容易ならぬものがあつた。顔色は全く土氣いろだつたと案内の老媪が語つていた。これが杏園画伯の遺作となり、八月二十三日京都で永眠されたのである。七月の私の古稀祝賀の会にはお祝いの品を送つていただいたのと思うと山門の一室、釈尊の前に端坐し、低い天井一面に描かれた素晴らしい童を仰いで感慨を久しうしたのであつた。ここを辭して駅附近の持明院を訪ね一茎多花の蓮を覗いて金沢にお別れをした。それから永平寺へ、芦原温泉へ、東尋坊へ、再び芦原の宿へ戻り泊らずにその夜十一時半ごろの夜行で帰途につき、一睡もしなかつたので翌十日

朝六時半に帰宅、三時間ほど眠つた。起きあがると再び私の柳務がはじまつた。金沢へ行つて、うれしかったのは北国柳壇の投句家諸君に会えたこと、金沢の古い柳友に会えたこと、川維大聖寺支部、川維小松支部の人たちに会えたことであつた。遠く新津市から来てくれた風柳君にも会えた。まだ私はゴリ養やくるみ養を噛みしめて金沢の集りを反芻している。こんな会が毎年一回でもいいから催して下さることを北国新聞社に甘えて見ようと思つている。

★大阪市・大阪市教育委からの要請で関西短詩文学連盟が大阪市民文化祭の一翼を担ふこととなり、その川柳部は別稿広告のように、川柳文学社の人たちや川柳雑誌社の人たちでお話をしていただくことになつた。川柳縁につながる人達は出来るかぎりの協力をお願いしたい。本年は文学博士魚澄惣五郎先が御講演下さるし、漫画家藤原せいけん画伯がリズム漫画の指導して下さいるので大変興味を喚んでいる★四月のハワイタイムスにチャンバラスターの長谷川一夫がフラダンスを女と踊つている写真が載つていたが、その後、同じ新聞に岸首相が女とふざけた態度でフラを踊つている写真が大きく掲載された。踊るのは自由だがこんな写真を載せさせることだけは拒否してもらいたいと思う。これは川柳には関係のない話だが。

編集

録音

梅志氏が加わつての会談で盛会。白柳子、摩天郎、安夢の三氏が姿を見せなかつた。(春葉)

★台風が来たらと心配してたのに今夜はカラリと晴れて風涼しくほんとの秋の夜。一三夫さんのメモにある企画が次々に片づいて行く。編集室へ集るのが楽しい。よい雑誌にするためにみんな張切つている。猫のニューフェイスジュリーさんが膝から膝へ坐をとりもつ。(古方)

▼先生を閉んでの編集部会談、今日はメンバーも揃いながなが時間も有効的に運んでゆく。突然林さんが横から私の書類入れを見て潮花さんハンドバッグですかに、ワットー一同が笑う。和服で来れば女性なみに見えるらしい。友の会にいると、こうなるのかしらんて。(潮花)

▼秋の訪れと共に気にかかるとのは台風と頭髪脱落、今日の会では古方氏春葉氏梅志氏と頭の方でもいささかひげ目を感じ乍ら豆秋氏の偉大なおつむに言及したり恐れ入ります(一飄)

▼編集会議の話の台間に、庭で虫が鳴いているのがよく聞こえる。机の下を猫が歩き廻つている。まだ秋だのに、もう正月の話が出るせわしい事だ。(竹莊)

▼私にとつては二回目の編集会議みな和氣あいいなのはまことにうれしい。ここでは路郎先生はよきパパぶり。霞乃先生はよきママぶり。会談が終つた頃台をはかつて出てきて愛嬌をふりまかれる。お菓子も果物も大方食べつくした(梅志)

▼霞乃先生がこれだけ編集部が集れば、句会が開けるではないかとおっしゃる。皆さん大乗氣だが、ボクだけ反対。なぜって、他の方は全部選者級ですぜ。なんにも「センのジャ」級はボク一人ですぜ。▼みよりの秋だというのにヤセてゆく柳誌がある。ボクはこんな時、増ページを考へている。十円たらずの原価で五千円札が出るが紙がこんなボロイ値で売れたらええ本が出ます。(一三夫)

安産のために ワタカルシエム 安産のくすり ワタカルシエム ビタミン入小粒二〇〇円 ワタカルシエムは妊娠中なるべく早目からおのみ下さい。

<p>所題時 11日(金)6時 大宮・並木・流れ 蟠地蔵駅下車・九二食堂</p>	<p>所題時 8日(火)6時 エピソード・埃・虫(二句) 大道二二三・天王寺小学校</p>	<p>所題時 3・3・3・句会 5日(土) 百円・番組・電化 堺市高須町島野工業会議室</p>	<p>所題時 23日(水)5時 出張・カメラ・我慢 兩橋交通局病院</p>	<p>所題時 21日(月)6時半 弟子・太鼓・大声 粉浜南海親和寮</p>	<p>所題時 20日(日)6時 指紋・流星・間一髪 松崎町二丁目・西光寺</p>	<p>所題時 20日(日)12時 銀・雨・火・力瘤・呼ぶ・制服 国鉄豊崎職員宿泊所</p>	<p>所題時 10日(木)7時 零く 宰相町二四七・清水白柳子居</p>	<p>所題時 10日(木)6時 汐時・先祖・表札 東淀川郵便局</p>
<p>所題時 11日(金)6時 大宮・並木・流れ 蟠地蔵駅下車・九二食堂</p>	<p>所題時 26日(土)6時 紋付・吉日・難題・先祖・精農 吉永町・牛神会館</p>	<p>所題時 19日(土)1時 名鉄リ・狂言・生命・料理・徳兵・島田 奈遷町・岡山第五鉄道寮</p>	<p>所題時 13日(日)1時 失恋・てんぷら・軽い・撫でる 米子岩倉町・美笑居</p>	<p>所題時 13日(日)10時 秋風・せつかち・構想 南壁屋町・国弘半休居</p>	<p>所題時 13日(日) 秋晴・掃除・宣伝車・行違ひ 戀愛幼稚園</p>	<p>所題時 13日(日)1時 虫・腰・ポケット 西糞三菱ストリート菱社事務所</p>	<p>所題時 12日(土)1時 寝言・音・逃げ足 立町・池富(関電寮)</p>	<p>所題時 1日(火)7時 開放・掃除 小松市大和町・伊藤茶仏居</p>

お買物は近鉄へ



アベノ・上六
近鉄
大 阪

量質共に日本一

サイクリングは シマノの
3段変速装置で...
どんな山道も楽々と一飛び!

シマノの 軽便秀を誇る
3.3.3.
自転車部品
フリーホイール
ハブ・スポーク

333

堺市 島野工業株式会社

スタートを
着心地のよい

O.S.K.
レディロード

株式会社 **大坂商店**
大阪府堺市東区島野町一丁目二番地
電話 東(94)7745 西(66)66番

(載転禁)

川柳雑誌 第十二巻
第十号
定価 五〇円
(送料四円)

半力年 三二四円
一力年 六〇〇円

昭和三十三年九月廿五日印刷
昭和三十三年十月一日発行

大阪府住吉島区内万代西五十丁目二五番地
編集長 麻生 幸二郎
発行所 **川柳雑誌社**
大阪府住吉島区内万代西五十丁目二五番地
電話 大阪 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

末っ子 (廿句以内) 西尾 葉選
サンプル (廿句以内) 伊藤 茶仏選
メモ (廿句以内) 松江 梅里選
寄附 (廿句以内) 田中 烏雀選
(十一月二十日締切)

毎号募集

近作柳梅 (俳諧廿句以内) 麻生路郎選
北川春草選
川柳塔(雑 詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)
(毎月二十日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 『近作柳梅』は一般作家の雑吟を募る。
▲ 『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

昭和三十三年七月一日 第三種郵便物認可
 昭和三十三年十月一日発行(毎月一回一日発行)

編集 兼 兼
 発行印刷人

編集 兼 兼
 発行印刷人

編集 兼 兼
 発行印刷人

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪六〇八一

電話大阪六〇八一

定価五十円(送料別)

不眠 昼間療法!



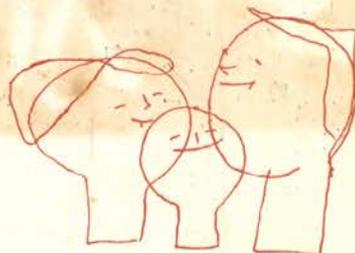
屋間の服用だけで、夜自然に安眠
 ができ、日中のイライラや不安感
 もとれ、明朗・能率的な生活を送
 れる習慣性のない安全な新薬です
 スッキリした頭で作句の為にも!
 晝はすつきり・夜はぐっすり

日中のイライラや不安感もとれ、明朗・能率的な生活を送れる習慣性のない安全な新薬です。スッキリした頭で作句の為にも!

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

お家族づれて楽しめる

あやめ池 大菊人形

9月29日▶11月24日

日本英雄剣豪伝繪巻32場面
 ★ 1000坪の大ホールに日本
 の英雄剣豪をあつめた大菊人
 形と日本最初の菊の活人形
 ★巖流島決闘野外水上菊人形

松竹歌劇出世太閤記20段
 米花真砂子 大淀しぐれらに
 による豊太閤出世ものがたり
 このほか遊園地一帯に楽しい
 菊の施設がそろっております

入園料 130円 小人65円

近鉄 あやめ池遊園地



明るい
 家庭は
 電化で
 ★御用命はお電話
 下されば係員が参
 上いたします

日本機械株式会社

本社 大阪市南区末吉橋通四丁目十六番地
 御堂筋新橋北詰新橋ビル
 電話 船場(25)1856(代表)~7番